

平成12年度(第6回)実体験プログラムに参加して

去る平成12年(2000年)8月21日(月)より23日(水)までの3日間、国際協力事業団(JICA)中部国際センターで開催された「高校生・国際協力実体験プログラム」に、本校生徒4名と共に参加し、東海北陸6県の生徒と担当指導教師や国際事業団関係者との意見交換と交流は、私自身は言うに及ばず、参加生徒にとっても極めて刺激的・有意義のものであった。この企画をされたセンター関係者に、心より謝意を表する次第である。国際理解教育・開発教育に関する私見を、以下の2点について述べてみる。

①中部国際センターの所長以下、担当スタッフによって企画された今回のプログラムは、それ自身が既に優れた総合学習の参考材料になるものであった。第1日目の開所式に続いての「グローバル・ビンゴ」では、「貧困・環境・食文化・日本と外国」などの簡単な質問形式によるビンゴを実施し、お互いに初対面で緊張している参加者間の交流を図る。又、事前学習で調べてきた「貧困とそのイメージ」というテーマで、各高校生がまとめの図表をもとに発表。次いで、それに関する質疑応答により、各発表の相違を認識した後、ケース・スタディ「青年海外協力隊員の事例研究」として、ネパールの奥地に保健婦として赴任した若い女性隊員の努力と現地の村人との軋轢と、他の男性隊員からの助言という、実際に体験した事例をもとに、このような場面に遭遇した場合の自分の対応の仕方、現地の人への配慮と交流、隊員の充実感の持つ意味付け、貧困の価値観・日本人としての在り方などを、グループごとにまとめる作業が課せられた。グループも、各高校の参加者がバラバラに分けられ、グループ名を決める事から始まり、各グループの役割分担も、生徒の自主性に委ねられた。この討論とまとめの作業は、第1日目の夕刻から第2日目の午前にかけて行われ、各グループの発表と質疑応答では、厳しい質問や議論の応酬が見られた。付添教員も各グループに入り、一個人として意見を述べたり、必要に応じて助言もなされた。

第1日目の夕食では、溶接技術で研修に来日しているブルガリア、エジプト、タンザニア、ヴェトナム、メキシコなどの9名の研修生や、マレーシア火災調査技術コース5名の研修生と共に、世界各国の食事を取りながら、英会話や母国語による簡単な挨拶語の紹介など、平素は体験できない貴重な夕食交流会であった。又、第2日目の昼食は、パプア・ニューギニアの芋料理とマラウイの豆料理を体験し、このような粗末な食事しか取れない開発途上国の人々への思いを馳せる点で、有意義な企画であった。午後は、マレーシア火災調査技

術コースの研修生が実際に日本で技術を身に付けている名古屋市消防局消防学校の研修現場をバス見学し、昨晚の夕食会で打ち解けた彼らが真剣に研修している違った側面を垣間見る事が出来た。酷暑の時期に、わざわざ家を一軒焼いて、現場研修するのも、熱帯地域にあるマレーシアの国情を考慮した背景があり、さまざまな組織が各分野で国際協力に携わっている事実を、生徒は、実感することが出来た。

研修ツアーを終えて、センターに戻っての、国際協力に携わる青年海外協力隊OBやNGO関係者、JICA職員との生の交流会が、生徒にとっては最も印象的で感銘を与えたプログラムであろう。

第3日目の、まとめの会と閉所式で、この実体験プログラムは終了したが、それぞれの内容が緊密に関連性・現実性を持っており、センターの作成したフロー・チャートにも提示されているように、それ自身が既に一つの優れた総合学習のヒントとなり、参考材料となるものであった事を、再付記しておく。

②これらのセンターの研修成果を、教育現場に、どのように位置付けし活かしていくかが、大切な問題であろう。私自身も、授業や生徒会活動などの場面において、開発教育の重要性について、生徒に話し実践させようとしてはいるが、理想と現実のギャップに直面せざるを得ない。事実、この実体験プログラムに参加した、開発途上国の貧困問題に真剣に討議に参加した意識の高い生徒においてすら、「非日常」から「日常」に移ると、つまりディスカッションから休憩時間になると、冷房の不十分さに愚痴を言ったり、食堂で肉やパン類を食べ残したり、新品の割り箸を使い捨てて平然としたりする状況が、現実なのである。

「国際」というと、すぐ欧米人と英語で会話を楽しむといったイメージが、まだまだ根深い。最後の1分間スピーチにおいても、もっと英語の勉強の必要性を反省点として指摘した生徒が何人かいたが、それは流暢に話すというよりも、内容のある英語を論理的に相手に伝えることが前提である。そして、何よりも足元の「己を知る事」、つまり日本の文化・歴史・伝統、日本人の物の考え方や価値観などについて、深く認識をする事の上に、初めて「国際協力・国際理解」活動は成立するのである。

大学の入学試験で、小論文の重要性は、ますます増加している。その出題ジャンルを大雑把に括ると、(1)「国際化」、(2)「情報化」、(3)「環境・資源と人口爆発の問題」、(4)「高齢化と社会福祉・介護」、(5)「哲学・心理学と人間の生き方」などであろう。もちろんそれ

らは、相互に関連し合ったりしてはいるが、特に前 (1) から (3) までの分野は、直接、開発教育に関わる問題として、小論文指導を通して、今後も努力していきたい。あるいは、国際協力事業団主催の「高校生エッセイコンテスト」ポスターを校内掲示すると、毎年必ず応募してくれる状況や、スリランカの女子孤児院の少女の自立のために、手動ミシンを送るための船賃を捻出するために、雪空の下で街頭募金を厭わない生徒会役員の生徒に接するにつけ、本校生徒を含め、現代の日本青年に対し、全く見捨てたものではないという希望を持ち、今後も開発教育・国際理解や異文化理解教育に微力をつくしていかななくてはならないと、決意を新たにしている。

愛知県立平和高等学校教諭 薫森 英夫

平成12年度高校生国際協力実体験プログラムの検証と

本校における開発教育の今後

1. はじめに

国際協力事業団（以下 JICA）からの1本の電話で、停滞していた本校の国際協力・開発教育が再び動き始めた。JICA 主催の高校生国際協力実体験プログラムに本校生徒が参加できる事は大変光栄な事であり、またとない機会であった。幸いにも天候に恵まれ、行程中特に大きな事故もなく、無事にプログラムが終了した。生徒達には素晴らしい体験だったと思う。

さて、今プログラムに参加した学校の引率者として、準備段階からプログラム終了後の事後指導までを検証し、生徒の感想などを取り入れてまとめてみた。今後の本校に於ける開発教育の取り組み（予定）についてまとめたものと合わせ、今後今プログラムのさらなる発展を目指される上で、このレポートが来年度以降の参考となれば幸いである。

2. プログラム参加のための準備について

(1) 参加の是非

中部国際センター（以下 CBIC）から「参加してみませんか」という打診を受けた時、

とても素晴らしい機会を頂けるということで非常に嬉しいということよりも、不安の方が圧倒的に大きかった。なぜなら本校生徒の生活態度・学力というものは余り高い評価を受けておらず、実際に学習指導も難しい毎日を送っていたからである。正直言って、「CBIC は本校の事情をご存じの上で取って連絡しているのだろうか。ある程度高校を選定した上での結論なのだろうか」と、考え込んでしまった。即答を避け、他の先生方と十分協議した結果、「とにかくやる気が一番大切だから、一生懸命頑張る生徒を参加させよう」という結論に達した。

後述するように、歴史から教えなくてはいけなかった準備は非常に大変であった。しかし、参加した後で明らかになったことであるが、今プログラムには学力や知識よりも、むしろ高校生らしい知的好奇心、正義感、語学力に関係なく、他とコミュニケーションを図ろうとする積極性が大切であった。どこの生徒にもそういった面はあるのだから、「学力や知識」を優先させようとした自分を恥じた。生徒達の可能性に教えられた気がした。

(2) 発表準備の苦悩

まず何が困ったかという点、「一体どのレベルの発表をしたら良いのか全くわからなかった」ことである。もし仮に「前年度はこのような発表でした」というものがあれば、少しは取り組み方も変わったのかもしれない。来年度以降に是非ご検討頂きたい点である。しかし、実際に当日の発表を見て、発表内容を次年度に引き継ぐというのは難しいということもわかった。なぜなら、模造紙2枚にまとめたものはたいていが図などであり、文章などではないので、それを見ても一体どんな発表だったのかを知るのは難しいかもしれないからである。

本校生徒にとって、英会話、貧困などの現代世界情勢、世界地理、世界史は苦手分野であり、7月から8月にかけて随分事前学習をした。その甲斐あって、何とかプログラムに参加できるくらいの基礎知識が身に付き、発表準備も間に合った。かえって発表したいことが多すぎて、どれを削るべきか考えるのにも苦労したようである。英会話に関しては、Assistant Language Teacher の協力を得て、しっかり学習出来たので、物怖じしない度胸がついたようだ。

このような困難があったにせよ、事前学習についての発表の機会を持つというのは非常に良かった。参加する事への意識が非常に高まるし、難しい語句の意味や、テーマについての歴史・現状などを把握するのに良い機会だったからである。事前学習に真剣に取り組む良い

動機にもなったようだ。

3. プログラム期間中

(1) エンターテインメント的な行事

グローバルピンゴ、研修員との食事交流会などがこれに当たると思うが、生徒達にとって、最も思い出に残った行事の1つだったようだ。特に食事会では、身振り手振りを交え、慣れないアクセントに悪戦苦闘しながらも、一生懸命意志の疎通を図ろうとする姿に、彼らの国際協力の第一歩を見出したような気がした。食事もおいしく、各国の文化を堪能出来た。借しむらくは、研修であるが故に、もっとお互いを知りたいという希望と、勉学のためのスケジュールが相反してうまくかみ合わなかったということであろう。もう少し、皆で楽しむ時間が欲しかったのは私だけではあるまい。

(2) 体験的な行事

青年海外協力隊 OG・OB などによる体験談がこれに当たると思うが、この体験談はやはり生徒達には衝撃的なものであったようだ（勿論私にとってもであるが）。本やテレビの中の話ではなく、実際に目の前の人から、援助・開発に携わっている写真を見せ、さらにその苦労話や裏話をしているのだから、生徒達にとって心にしみるものだったのであろう。もっと話を聞きたかったという意見が圧倒的に多く、是非来年度以降は枠を拡大して頂きたい行事であった。

逆に消防学校での研修風景の見学に関していうと、海外研修員の研修風景が直接見られるというとても貴重な体験が出来たし、面白いものではあったが、半日費やしてまでのものではなかったように感じた。いろいろな兼ね合いもあろうが、研修風景を CBIC 内やその近くで見られれば、体験談を聞く時間枠の拡大、参加者同士のコミュニケーションを図る機会などに費やせたのではないだろうか。

(3) 熟慮・発表する行事

調べてきたこと発表とケーススタディがこれに当たると思うが、この二つのおかげで今回のプログラムが、最終的に非常にレベルの高いものになったように思われる。「貧困」について事前に調べて来たが故に、生徒達の「貧困」に対する考え方やイメージが多少凝り固ま

りつつある感があった。しかし、ケーススタディでは、出身校に関係なくシャッフルされたグループの中で意見を出し合ったので、いろいろな考え方があるということを改めて学んだようである。さらに、そのグループの中でやっとの思いで意見調整して発表したことについても、賛成・反対を含めた深い討議がなされ、「貧困」や「協力」についての難しさを痛感したようである。生徒が、まだまだ討議する内容や時間が足りないと感じるぐらい盛り上がり、大成功だったと思う。「正しい答え・間違った答え」が無い討議で、それぞれが自分の意見を言えたことが非常に良い経験になったであろう。

また、調べてきたことの発表では、各学校が工夫を凝らしていたので、同じテーマについての発表なのに、いろいろな角度から捉えた発表に触れられたという点でも非常に良かった。しかし、進行上どちらが良いとは言えないが、最後にまとめて質疑応答したことにより、発表内容に関して細かく突っ込んだ質問が減ってしまい、ケーススタディに比べると多少盛り上がりには欠けた感がある。最初の行事ということで遠慮もあったのだろうが、各校の発表毎に質疑応答の時間を取り、さらに最後に全体で質疑応答の時間を取ると良いのかもしれない。

4. プログラム後

10 日以上に渡る準備と、プログラム中に体験したことから生徒が得たものは非常に大きなものであったと思う。しかし惜しむらくは、彼らの3日間の活躍を、世間はおろか、本校職員や生徒ですら知らない者が多いことである。あれだけ素晴らしいプログラムがあったということ、そしてあれだけ高レベルな討議にも関わらず、生徒が頑張ったということをも是非多くの人に知ってもらいたかった。そうすれば、さらに生徒達が自信を深め、今回の体験で得たことを活かしていこう。それにはやはり、マスコミとの連携は不可欠である。今回本校がマスコミにコンタクトをとったのがプログラムの約1ヶ月前と遅く、初参加で詳細もわからないこともあり、連携がうまくいかなかったのが残念でならない。また CBIC からも複数のマスコミに打診されたようだが、マスコミ各社があまり応えてくれなかったことも残念である。某TV局によると、内容が興味あるものである場合、企画・制作に最低でも1ヶ月半は掛かるそうなので、来年度からは是非早めにコンタクトを取ることをご検討頂きたい。今プログラムはとても素晴らしいものなので、世間に十分認知してもらえらるものだったと確

信している。

また、プログラムを終えて痛感したことがある。それは、学校や地域などが、プログラムに参加した生徒達に、その後もそういった方面で活躍する場を与える、きっかけづくりをしなければならないということである。現在の高校生の気質は、本校を含めて、「この場ではこういうことを一生懸命話し合えるけれど、学校へ帰ると話し辛い雰囲気がある」という感想に象徴されているような気がする。しかし、あれだけ素晴らしい体験をしたのだから、感動が薄れる前に次のステップに移れるよう、本校では現在働きかけているところである。何とかそういった環境整備を、地域を含めて模索し、実現させなければならないと感じている。それが上手くいくかどうかはわからないが、3日間のまとめをレポートにして提出したら終わりということだけは、せめて避けるようにしたい。

5. 今後の取り組みについて

(1) 個人として

今回本校生徒が今プログラムに参加したことで、一番良い体験をしたのは実は引率者であった私なのかもしれない。それは、生徒の頑張りを目の当たりにしたからだけでなく、離れつつあった援助、開発教育、国際交流に関する行事に携わり、その楽しさや素晴らしさを思い出したからである。

この体験を活かして、今後はこれが縁となった JICA や CBIC はもちろんのこと、以前つながりがあったアジア保健研修所(AHI)などとも交流を持ち、さらに見識を深め、机上の空論だけではなく実用的な活動に励むよう努力していきたい。また、地域の NGO とも交流を持ち、草の根の国際交流として、私自身や本校が出来ることは何かを模索していきたい。さらには、そういった活動の現状や問題点などを本校生徒、職員、保護者などに徐々に広めていき、1人でも多くの人に開発教育や国際協力に、興味や理解を示してもらえるように努力していくつもりである。

(2) 学校として

前述したように、本校では数年前から国際交流が途絶えていた。以前は毎年トンガ王国の学校に援助物資や友好の手紙を送るなどして活発に行っていたが、本校を取り巻く情勢が

だんだん変わり、またトンガ王国もある程度豊かになったということで、国際交流や援助は衰退する一方だった。しかし、今年本校がこのプログラムに参加したことで、生徒や職員の間から国際交流や援助の復活を求める声が多く挙がるまでになった。これを良いきっかけとし、以前よりもさらに活発な国際交流や開発教育を行っていきたい。それには私や今回プログラムに参加した生徒4名と生徒会が中心となっていくために、まだまだ難しい面もあろうが、学校長からもGOサインが出ており、その指導と協力のもとに、既に水面下で順調に動き出しつつある。一度衰退していたので、最初のうちは出来ることは少ないかもしれない。しかし本校がそういった活動をしているということをマスコミを通して知ってもらい、他校のまねではなく、地域でトップを切っているいろいろな国際交流や開発教育に挑戦していく必要がある。そうすれば、既に活発に活動を行っていて各方面から高い評価を受けているボランティア部と共に、本校の2大看板の内の1つとして、平和高校の国際協力と開発教育が地域に認められるようになるだろう。1日も早くそのような日が来るように、現在校内で調整中である。

(3) CBIC との連携について

「せっかくこういう形でCBICと縁ができたので、本校が国際協力・開発教育を進めていく上で、是非CBICと提携していきたい。」と学校長は語っている。当然私も同感で、個人レベルだけでなく、学校を挙げて協力体制を整えていきたい。相手もあることなので難しい部分はあるだろうが、具体的に今年度中に実現しそうなものとしては、サーモン・キャンペーンを利用して、海外からの研修員を招いた語学研修的な授業になるだろう。学期に1~2回、研修員を招いて約半日、1~2クラスで授業に参加してもらおうという形になるだろうか。自己紹介、自国の紹介、自国の現状説明や来日目的などを英語で発表してもらおう。それは生徒にとって英語の聞き取りなどの勉強になるだろう。そのお礼に、今度は生徒が現代日本の高校生の考え方や様子を英語と日本語で発表し、それが研修員にとって日本語や日本事情の勉強に役立つようにする。その後、交流を深めるために各グループに一人ずつ研修員が入り、途上国についての意見交換をしながらコミュニケーションを図る。それ以上は個人レベルで連絡を取り合ってもらい、輪が広がっていけば、と期待している。授業後、別室で希望する生徒や職員と交流を深め、援助・開発について双方が何かを学び取る機会が設けられればと思う。これはまだ企画段階の話であるが、もしこれと似たような形で実現でき、成功すれば、

定期的に行う準備がある。当然、(今度こそ)マスコミにもその風景を紹介してもらい、JICA や CBIC が援助・開発や国際交流の輪を広げようと努力していることと、本校が開発教育に熱心であることが世間に認知してもらえれば何よりであろう。

またその他に、来年度以降には高校生エッセイコンテストへの参加や、もう1度高校生実体験プログラムに参加できるように、学校を挙げて努力する予定である。

6. おわりに

前述したように、今回のプログラムに本校生徒が参加できたことは非常に光栄な事である。そしてそれが彼らにとって非常に良い経験・思い出となり、彼らが国際協力に興味を持ってくれたのは何よりの良い結果である。このような素晴らしい体験が出来たのも、CBIC の方々の気が遠くなるような準備とご努力、参加した生徒諸君の頑張り、引率された先生方のご尽力、快く我々を送り出して下さった各校の諸先生方・保護者の皆様など、すべてがうまくかみ合った賜物であると確信している。

さらに、今回のプログラムが素晴らしく感じたのは、手作りの暖かみが感じられたことも挙げられる。決まりきった発表や話し合いではなく、実際の体験などをベースにしたものを題材とし、皆で盛り上げていこうという暖かみがひしひしと伝わってきた。本校生徒1名が体調不良になった時も、CBIC の職員全員が気に掛けて下さり、暖かく適切な対応をして頂いたので、彼はすぐに回復した。そういった心遣いや暖かみをおそらく生徒も感じ取り、それに応えようと彼らが頑張ったので、あれだけ素晴らしいプログラムになったのだと思う。

このプログラムに参加したことで、本校の国際協力・開発教育への扉が再度開かれるきっかけとなったわけであり、職員全体に開発教育の重要性を再認識する機会が出来たのは喜ばしいことである。今回このプログラムに参加した学校それぞれ立場は違えど、JICA や CBIC と協力体制を密にしながら、開発教育・国際協力に一層力を入れていこうし、本校もそれに後れをとることなく、しっかりした体制を確立するべく、現在努力をしている最中である。

本年度で6回目ということで、ある程度完成され、素晴らしく構成されたプログラムであったが、さらなる発展を目指される上で、このレポートが来年度以降のプログラム運営に多

少なりとも参考になればと切に願う。また、私と本校生徒4名がこのプログラムに参加するにあたり、ご協力を頂いた方々に深く感謝をして、このレポートを終えたい。

岐阜県立揖斐高等学校教諭 吉田 映子

プログラムの総括及びこれからの開発教育の取り組み

1. プログラムについて

どのプログラムも内容の濃いもので、充実したものとなった。

1) 調べてきたこと発表会

本校は、生徒から出された意見をそのまま書いただけであったため、少し恥ずかしい思いをした。他校の学校一丸となって取り組んでいる姿勢がとてもよかった。

2) ケーススタディー

発表する生徒、しない生徒が決まってきたが、それぞれに意見を出しあい、討論することができた。時間があれば、いつまでも話し合っていたいような気がした。

学校ではこれだけの時間をとって話し合うことがないため（50分授業ということもあるが）、一度、2時間連続の授業で十分な時間を取り、やってみたいと思う。

3) 国際協力に携わる人と話そう

時間が90分であったが、120分取り、一人20分の話でもよかったと思う。一人だけの話を長く、深く聞くより、何人かの様々な体験が聞けるこの方法の方がよかったと思う。いろいろな立場（協力隊OB、NGO関係者）の方がいらっしゃりよかったが専門家の方がいらしゃると、よりJICAの技術協力の方式を生徒が知ることができたのではないか。

4) 研修コース見学ツアー

「国際協力」という視点以外からでも、大変参考になった。

5) まとめのお会

この3日間で様々なことを体験し、国際協力について真剣に考えていたことが伝わってきた。ただ、本校生徒については、少し不安が残る。このプログラムの目的の「理

解し、考え、行動する」の行動部分が、今後の生徒にどう表われるか、期待したいところである。

また、各プログラムには到達目標が書かれてあり、これを確認しながら行うことができた。このように到達目標が明確にされていることは分かりやすいし、学校の毎時間の授業でも行っていかなければならない、最も大切なことであると改めて思った。

2. これからの開発教育への取り組み

国際化が進み、世の中が狭く感じる中、開発教育の必要性をますます感じています。

開発教育を実践していくうえで、まず、情報が少ないということから、十分な情報を得ることが必要と思われれます。途上国の正確な現状を知ること、他校でどのような実践がなされているか知ること、セミナー等に参加しいろいろな人の話を聞き、どのように行っていけばよいか自分自身しっかり研修を積むこと、また、すすめていくうえで相談できる人が身近にいるといいな等、思うことは沢山あります。今回のプログラムの目的の一つである「JICAとの継続的な連携関係の構築」をぜひ目指していきたいと思えます。それにはお互いの情報提供を行っていくことも大切と考えます。

今年度は、「途上国の福祉」について調査し、できることがあればやってみたいと思えます。今回参加して「途上国の福祉」について情報が得られましたことも大きな収穫でした。

3日間、ありがとうございました。参加させていただきまことに感謝申し上げます。

三重県立伊勢高等学校教諭 磯島 純菜

平成12年度高校生国際協力実体験プログラムの総括と

これからの開発教育への取り組みについて

1) プログラムの総括

国際協力事業団(以下JICAと略す)主催により、平成12年8月21日(月)～23日(水)の2泊3日、名古屋の中部国際センターで、北陸・東海の7高校35名(1校につき引率教師1名、生徒4名)で行われました。このプログラムに参加するにあたって、「貧困に対するイメージ・原因・解決法」を模造紙にまとめるという「事前学習」が生徒に出されています。

した。この「事前学習」は、JICA 側では、生徒に負担になりすぎるのではないかと懸念があったようですが、当日、生徒が意見を出し合い、質問しあうことが活発に行われたことから非常に良かったように思います。「貧困」とは何かを考える時間を持つことで、なんとなくわかっているようなわかっていないような状態から自分なりの意見を持ち、本等で調べることで新たな発見をし、知識を増やしたようです。

初日の21日は沢山のプログラムが組まれており、生徒・教師・職員の方全員が長い1日と感じられたと思います。事前学習でまとめたことを発表する「調べてきたこと発表会」では、自分たちが思ったこと以外の意見を他校の生徒が発表し、いろいろな考えや新たに学ぶこともあってそれぞれの視野を広げられたようです。その流れでケーススタディへと進み、「ネパールでの衛生面の改善のためにトイレを作りたいが、村長の同意が得られない。」という問題を抱えた青年海外協力隊の方の実体験をもとに、教員1名、各高校1名ずつの生徒4名のグループに分かれて話し合いました。この実体験のいくつかの問題についてまとめるという作業は夜もグループ別に行われ、翌各グループで発表を行いました。問題の解決は容易ではなく、様々な角度・立場から考え、開発途上国の状況を正しく知ることが大切であるとの「ケーススタディ」を通して学びました。英語で話ができるか不安を感じ、また世界各国の料理が食べられると楽しみにしていたのが「研修員との交流食事会」であったようです。思ったより話が通じ、会話できたことを喜んでおり、また英語ができればもっと話せるし、知らない事柄だから話せないと感じてもいたようです。この食事会で研修員の方と出逢いお話をし、また翌日の「研修コース見学ツアー」では研修員の方々が火災調査技術を学んでいるところを見学し、国際協力とは資金や物資を送ること、人材を派遣することだけではなく、日本に招いて知識や技術を学んでもらうことも一つの方法であると改めて気付きました。

「国際協力に携わる人と話そう」では、青年海外協力隊OB・OGの方や、NGO経験者や日本で研修コースのコーディネーターをされている方々の話を聞き、質疑応答ができて非常に良いものでした。ボランティアといってもいろいろな形態があり、派遣されている国の状況も様々であると感じられました。やはり、実体験に基づいた苦労話や、現地の写真などは訴えるところが大きいので、国際協力が身近に感じられる機会でした。懇親会でも意見が出ていましたが、グループ数を減らし、話をできる時間を増やす方向で検討をしていただくと良いのではないのでしょうか。

最終日の1分間スピーチでは、全員で輪になり、それぞれに感じたこと、これからどうしていきたいか、何ができるかを自分の言葉で話しており、全員がそれを真剣に聞いており、この3日間のプログラムが楽しい夏休みの思い出の一つだけに終わらないと感じさせてくれました。

3日間を通して、生徒の引率ということでしたけれども、自分自身も学ぶことが多く、JICAの多くの活動を知ることができ有意義でした。教師の立場として難しく感じられたのはどういう立場を果たすのかということです。生徒にとって教師の意見というのは反論し難いものであろうし、しかし、助け船も必要であろうと思います。「教師は進行役を」とJICAからお願いされていましたが、自分がうまく役割を果たせたかどうか疑問です。

2) これからの開発教育への取り組み

開発教育にどのように取り組んでいけるかについては考えているところです。生徒会の活動として、JICAから開発途上国の状況や、青年海外協力隊の活動のビデオ上映、青年海外協力隊のOB・OGまたは研修員の方の講演を来年の文化祭での企画として考えています。実現が難しければ、ESS部の活動として小規模でも進めていきたいです。国際協力ということももちろんですが、人のためになにかできることを、と考えて取り組みたいと思います。英語教師という立場から、9月初旬に行われた実力テストの問題に、紛争の起こっている国から難民機関を通じてアメリカへ渡り、また国のために紛争国へ戻ることを決意した女の子とその女の子の受け入れをしたボランティア家族の話を出題しました。自分のことばかりを考えがちな生徒が何かを感じてくれればと思います。授業では、こういったことを英文で読み、クラスで意見交換、どうすればいいか等の時間を少しずつもちたいと考えています。

石川県金沢西高等学校教諭 今井 和愛

平成12年度高校生国際協力実体験プログラムに参加して

「やっぱり、連れて来てよかった！」と思いました。国際協力の在り方を考えるケーススタディを中心に、研修員との交流及び研修コースの見学、そして国際協力に関わる人たちとの交流と、普段の学校では考えないことを深く考え、体験できないことを体験出来たと思います。生徒、私にとって今後のよい糧となるでしょう。2回も連続して本校から生徒を参加

させていただき感謝申し上げます。

プログラムの目的はおおむね達成したと思います。生徒は、貧困問題を通して途上国の状況と課題そして国際協力の難しさを多角的に理解できるようになったと思います。また、JICAについても理解が深まったと思います。

さて、私は2回目の引率ということで、どうしても昨年度と比較して批判的にみってしまう点をご容赦願います。このプログラム自体は充分素晴らしいということは、まず大いに認めています。そして今後も継続してほしいと思います。その上で、私の力量や環境を棚上げして感じた点を率直に書きたいと思います。

まず、事前学習として「貧困」についてのイメージを模造紙にまとめさせたことは、非常によかったと思います。いい動機づけにもなりました。また、生徒のイメージや発見のなかには、「こころの貧困」や「差別」などの問題も出てきていて、多様な問題をはらみ様々な問題に発展させることができる事前の課題だったと思います。

次にプログラムの中心のケーススタディですが、協力隊員の事例は非常によく考えられてつくられたものだと思いますが、後半の設問の意図が明確でなく、答えようとしても何を答えたらよいか戸惑いを感じました。設問5・6・7で、途上国と先進国（日本）の仕事や生活の在り方について考えさせたかったようですが、それまで現地の協力隊員の立場になって考えていたのに、事例との関連性を希薄にして急に今の日本の高校生にもどって考えるのに無理を感じました。また、仕事についても、目に見えて人の役に立ち充実感を直接感じる仕事を望んでも、望んでいる生徒がみんなそのような仕事につけるわけでもない現実です。もちろん、途上国と比べものにならないのですが。そんなに簡単に仕事を「人の役に立つ充実感」で差別化してよいのか、気になりました。つまり、人の役に立つ充実感を直接感じにくい、社会には必要な仕事は一杯あるということを知ることでもまた大切なことのように感じました。

各グループで話し合う時間は足りなかったようです。1日目の夜、話し合いで遅くなるのがみんな嫌なので、はやめに結論を出そうとする傾向が出てしまいました。ただ1つの班は11時まで話し合っていました。結果論ですが、2日目の研修コース見学ツアーの時間を減らし、午前中にもう少し話し合いの時間がもらえればよかったと思います。全体のグループ発表ではなかなか質問や意見がでにくいので、この各グループでの話し合いに重点（時間）

をかけるべきだったでしょう。

ともあれ、このケーススタディが次の「研修コース見学ツアー」と「国際協力に携わる人と話そう」をより実のあるものにしました。特に協力隊のOB・OGに具体的に協力の在り方や困難さを生徒は質問したり、具体的な話に深い理解を示していました。

生徒たちの全体での印象深かったことは、研修員や協力隊のOB・OGとの交流であったようです。このことを逆に考えるなら、ケーススタディが少し難しかったようです。それでも、これほど深くしっかり考えたことはないと言っていました。その点、もう少しグループ発表やまとめて生徒たちが自分の思いや感想を言い合うことができれば、もっと素晴らしいものになったでしょう。そのためには、ゲームや簡単な話し合い（エンカウンター）を用意して生徒たちを交流させて、もっと気軽に話し合える雰囲気をつくるべきだったと思います。やはり、他校との交流もこのプログラムの大きな目的にしていきたいと思います。その点が今回やや不足していて、ケーススタディが重かったです。生徒が楽しく感じるもの（教材）をつくりだしたいものです。

私自身がこのプログラムで一番強く感じたことは、「わかる」とは体験や人との関わりを通して可能になるということです。いろいろな知識は本を読めばわかりますが、本当に「わかる」ことは、こうやって考え人と話し合い現地に行った人や現に国際協力している人と交流して初めて、可能であることを改めて感じました。

また、この研修の期間に「なぜ国際協力をするのか」、「今日本で生きていて何ができるのか、何をすべきか」の二つのことを考えさせられました。単にヒューマニズムだけでなく、やはり相互依存する世界とグローバルイシューという問題そして日本の国際的な依存・在り方にも、生徒たちの考えをひろげさせたいと思いました。そして、外への国際協力ばかりではなく、内における差別やいじめあるいは貧困（豊かさの中の貧困・こころの貧困も含めて）についてもっと考えさせるべきだと思いました。先進国の豊かさと快適さに慣れてしまった私たちは、本当に豊かなのかを問わざるを得ないと思いました。実はこの外と内の問題は同根というか相同の関係だと思われるからです。高校教師としては、身の丈にあった足もとの内なる問題にも、逆にしんどいのですが、関わって行かざるを得ません。しかし、すでに事前学習で述べたように生徒もこの問題に気づいていて、焦点があてられそうです。

このように、開発教育の中には様々な方向性や可能性が開かれています。方法的には教授

法としてより進んでいる欧米のゲームやエンカウンターの手法が取り入れられていて、国際化社会の到来と総合的な学習の実施とあいまって、今後ますます盛んになるでしょう。私も社会・公民科の授業や総合的な学習に取り入れ、今後実践していきたいと思っています。JICAではそれを支援する教師対象の研修会をぜひ実施していただきたいと思います。

最後に、このプログラム実施の中心メンバーである野口さん・石井さん・沖浦さんのご苦勞に感謝申し上げます。JICA 中部国際センターの皆様ありがとうございました。

福井県立若狭高等学校教諭 神田 実

「高校生 ODA 実体験プログラムを通して」

1. プログラムの総括

今回、3年前に続き2回目のプログラム参加なのですが、前回よりも私自身が余裕をもって参加できたような感じがします。ゆえに、より国際協力・開発教育にゆとりをもって自分自身の思いを向けられた研修であったと実感しています。

(1) 第1日目

～発表会～

・事前に提出課題があったことはとても良かった。内容的にも前もって「特に書籍等で調べる必要はありません」と指示されていたこともあって、着飾らない生徒たちの純粋なイメージが感じられていたことが何よりも収穫であった。

～ケーススタディ～

・ケーススタディにおいて、仕方ないかもしれないが、やや他班の1つの考えに対する集中的な指摘がみられたのが気になった。しかし、意見を交換し合う雰囲気思ったより早くに見られ始めた場面だったので、「おっ、なかなかいい感じになってきたかな」と直感した場面であった。(3年前参加した時には、1日目にこんな印象を受けなかったように思いました。)

・日頃このような機会や内容にほとんど出会っていないので、生徒たちにとっては、とても新鮮であったように思います。それに、異文化とコンタクトする場合には、さまざまな点に配慮しなければならないということにも気付いた時間であったと思います。(いかに日頃の自分たちが、狭い視野と観点で生活しているかも多少なりとも感じられたように思います。)

～交流食事会～

・研修生との交流時は、最初から最後までフリータイムな感じで流れていったので、最初は何らかのグループ別の形態から入り、ゲーム的な企画がいくつかあると良かったのでは？と思います。

～その他～

・最初に「グローバルビンゴ」のような企画があったのは、良かったし、内容的にもあのレベルくらいが適当なところではないかとも思います。私自身はかなり楽しかったです。

・8時以降の活動は少々きつかったように思います。(せめて研修期間がもう少し長いと、2日目以降にでもそんな8時以降の討議活動時間を設けても良いかとも思いますが、いきなり初日では身体的にきついように感じました。)

・2泊3日ではなく、せめて3泊4日くらいあるとディスカッションの度合いも増したであろうし、生徒たち同士の共同活動にもよりプラスさを増していくのではとも個人的には感じています。

(2) 第2日目

～発表会～

・ディスカッションをするには、座席などの会場配置についても配慮すべきであったようにも思います。ディスカッションという場面は感じられなかったのが、個人的な印象です。教員側の声のタイミングと量も難しい点かもしれませんが、教員は極力、口を出さない方が良いでしょうにも思います。(教員の意見に生徒達が自分自身を抑制してしまった感じがあったように思います。)

～研修コース見学ツアー～

・火災調査という特殊な現場での見学であり、とても興味深かった。それに消防学校の先生方が、研修生の方々にどのように接しておられるかも現場や講義からも具体的に伝わってきたので、良い見学体験であった。

～国際協力に携わる人と話そう～

・たくさんの講師の方がおられたのは良かったのですが、個人的には少人数の方による講演会的な場面が最初に設定されていた方が良かったように思います。そして、それを受けてのグループ別懇談という順の方がより内容が深くなったのではという印象をもちました。(前はそんな感じがあったので…)

～懇親会～

・短い時間ではありましたが、それぞれの現場の先生方や JICA の職員の方々とあのような場を持てたのは良かった。

・学校という教育の現場と JICA という双方の異なる機関が、タイアップしていくことがとても大きな力になるという強い印象をもてたことは非常に心強いことです。

(3) 第3日目

～まとめの会～

・生徒たちが、それぞれの思いを自分自身の声で発表し合えたことは貴重な体験であった。個人差はあろうが、彼等なりに何かを収穫できた研修期間であったという印象が伝わってきた。

(全体を通して)

このような機会に現場の教員がよりたくさん参加する必要性を強く感じました。そして、1回2回ではなくこのような機会に参加し続けることの大切さも感じています。私たち教員が、「国際協力・開発教育」という分野において、JICA の方々の協力により学校現場へ啓蒙していく重要性が問われているのだという印象もとても強く受けました。それは、JICA の方々が、現場で悩んでいる私たちにとってとても心強い味方であるということが再確認できたからだと思っています。

そして、全国規模でのネットワーク作りが必要だということも実感しています。

これからも、参加できたご縁を大切に、できる限りこのような機会に参加し続けたいと思います。

2. これからの開発教育への取り組みについて

先にも述べましたが、特に私は学校教育の現場（特に教員）への啓蒙活動の必要性を強く感じています。もちろん、時間のかかることですし、啓蒙活動だけではなく、そんな活動がより浸透しやすい環境をあらゆる機関と整備していくことも並行してとても必要だとも思います。

急速な勢いでグローバル化が進んでいる昨今、これからは益々「国際協力・開発教育」という分野への注目度が増していく時代であろうと予測します。

しかし、「国際協力・開発教育」という分野の学習時間だけではなく、従来の教科学習も

「基礎学力」として、とても重要性は増していくとも思います。学力低下が叫ばれる中だからこそ、そんな「基礎学力の養成」と「国際協力・開発教育」のバランスのとれた教育環境の整備と実践が大切であると思います。

そして、高校レベルだけではなく、より早期な時期からの「国際協力・開発教育」プログラムの提供も大切だとも思います。グローバル化が進めば進むほど、現代人が忘れがちな人間関係が問われてくるようにも感じています。根本は人と人との関係ですし、人作りがすべての環境・社会を築くものだとも思います。

今、教育現場に直接携わる私たち教員自身が、できることを少しずつ行動に移していくことが大切だと感じています。それには、いろいろな方法があると思いますが、今私自身が強く感じていることは、全国に広がる「国際協力・開発教育に携わるネットワーク作り」が何よりも必要だと感じています。単に必要なだからということではなく、それがとても大きな力となり、少数派ゆえに困っている全国の先生方にとってもとても心強い味方になるであろうと感じているからです。というのも、現在のところ「国際協力・開発教育」ということを十分な時間をとって生徒たちに取り組みさせることができないような感があり、「国際協力・開発教育」への現場での理解がまだまだ得られていない状態があるように感じているからです。そんな状態があるのも現実を考えれば無理もなく仕方ない感もありますが、地方で1人悩むよりも全国のネットワークの中で悩めるような環境があると、それはとても大きな励みと行動への大きなエネルギーに結びつくのではという期待感があります。

今日「グローバルやインターナショナル」という言葉が氾濫していますが、日常の中で、もっと身近な人間関係にも目を向けなければいけないという思いがあります。一言で言えば「異質なものに対する理解と寛容」とでも言えばよろしいでしょうか。つまり「モラル」の問題であり、最も身近な場面での周囲への理解と思いやりがあつてこそその「国際理解・国際協力」であると思います。

悲しいことに、世界にはまだまだ多くの戦争が存在しています。平和を訴える「憲法九条」をもつ国の私たちが、これからの国際社会の中で果たすべき役割はとても重要かつ大きな意味があると感じています。しかし、戦後生まれの人間が人口の約7割を占める今、「記憶の欠損」は確かに進行しているようです。最近、TVから見る世間どころか、身近な日常の中でも、「12月8日・8月6日・8月15日」などの日が、いったい何の日なのかも「知らない、わからない、伝えることもできない」という若者たちの姿に出会うといったことが頻

繁にあるのが気がかりです。「過去の真実」に目を背けない姿勢が、戦後生まれの人間たちに問われていると強く感じています。「平和教育」という分野の重要性もとても強く感じると共に、「国際協力・開発教育」といった分野とは密接な関連をもつ分野であり、並行して取り組んで行かねばならない大切な分野であるとも感じています。「国際協力・開発教育・平和教育」といったものを一言で語るとすれば、私は「心の問題であり、心の教育である」と感じています。

国立富山商船高等専門学校助教授 金川 欣二

JICA高校生国際協力実体験プログラムに参加して

○プログラムに参加して

第6回の実体験プログラムに高専としては初参加させていただきました。

本校は商船系・工業系・文科系の学科を持ち、十数カ国を超える留学生を受け入れてきました。商船学科では練習船で各国を訪問し、国際流通学科でも環日本海諸国やオーストラリアでホームステイすることによって自然に国際教育がなされています。

ただ、職業意識の強い学校で、これから職業選択の一つのステップとして大学を目指そうとしている他の高校生とは国際協力に対する意識が高くないことが予想されました。しかし、逆に、ごく普通の学生が国際協力というものをどう受けとめるかという意義があるかもしれないと参加させていただきました。

JICAのスタッフによって綿密に計画されたプログラムのおかげで、学生たちは国際協力の現状、問題点、自分自身との関わりについて様々なことを知り、同時に考えることができたようです。

「貧困」について当初抱いていたイメージや原因、解決方法より、はるかに深い理解が得られたと思います。

最後のまとめのスピーチの中でも「自分は情報工学科で最新機器で学んでいるが、コンピューターによって貧困の格差が更に広がることが予想されます。これからはここで学んだことを念頭に入れて学んでいきたいと思います」など21世紀で最大の問題となる「デジタル・デバイド」ということに気づいていました。

また、ふだんは他の高校生と交流することが少ない高専生にとって多くの知己を得たこと

は参加者にとっても大きな財産になったといえます。

予見していた以上の成果が上がったと思われます。

○国際教育について

今度のプログラムで強調されたことは「国際理解」「国際教育」「開発教育」でしたが、広い意味で「共生教育」ということがいえると思います。

この点に関しては拙論「“グローバル・リテラシー”教育の諸問題-----リテラシーの変遷と21世紀」(富山商船高等専門学校研究集録第33号 2000年)の中で述べていますが、グローバル・リテラシーの内容としては次のようなものを考えています。

(1) カルチュラル・リテラシー (2) 多文化教育 (3) 異文化適性 (4) 自己表現能力 (5) 地球環境。

日本人としての文化を担って、他の文化や地球との共生を図ることが重要であると結論していますが、「共生論」などの理論で終わるのでなく、実践として学生たちに広がっていくことを願っています。

○今後の活動

これからはJICAやその他の団体(例えば、富山国際センターなど)と国際教育についての実践や実践例やデータの蓄積、教科書の開発に尽力していきたいと考えています。

2001年には本校のカリキュラムが改訂される予定になっており、一般教科や国際流通学科の専門の中で少しでも「国際教育」を取り上げるように提案していきたいと考えています。

また、今回得た様々な情報をホームページや講演会等で還元していきたいと思っています。サーモン・キャンペーンなどJICAの支援をお願いすることも多いと考えられますのでよろしくをお願いします。

今回のプログラムに関しては今秋に発行される『福祉しんみなど』に掲載したり、ボランティア・フェスティバルなどの機会も含め、広く市民にも国際理解、国際協力の大切さをPRしていく予定にしております。

また、既に商船高専のホームページ(<http://www.toyama-cmt.ac.jp/~kanagawa/volunteer/jica.html>)で今回のプログラムに関する記事を載せております。

他校との連携もこのホームページを中心に発展して行きたいと考えています。

最後になりましたが、学生・教師ともに貴重な機会を与えて下さったJICA職員並びに関係者に心よりお礼を申し上げます。

アンケート結果集計 (34人中 32名が回答)

1. プログラムの期間はどうか?

①長い	0
②ちょうど良い	25
③短い	7

①及び③と答えた人はどれくらいの日数が良いか教えて下さい。

- ・ 4泊5日
- ・ 一週間くらい
- ・ 4~5日 (2名、一名教師)
- ・ あともう1日くらい欲しかった。
- ・ あと1日くらい

2. グローバルビンゴはどうか?

①楽しかった	15
②普通	17
③くだらない	0

3. ケーススタディーの内容はどうか?(複数回答 1名あり)

①大変興味深かった	15
②興味をもてた	13
③普通	5
④あまり興味をもてなかった	0
⑤全く興味をもてなかった	0

①及び⑤と答えた人はその理由を教えてください。

- ・ 討論できたから。(いろいろな人と意見交換ができた)
- ・ 今まで経験したことのないことだったから。
- ・ 今回のプログラムに対し、積極的に参加しようという姿勢が、ケーススタディから明らかに見えたから。(教師)
- ・ 難しい話になった時もあったけど、知識が増えたから。
- ・ ちょっとした問題でもたくさん意見が出て、良い討論になったから。
- ・ 現実を知ることができた。
- ・ 私は青年海外協力隊員として将来いろんな国に行ってみたい!という気持ちが少しあったので、興味深かったです。でも国際協力は想像以上に難しいんだなあ!と思いました。
- ・ 前から青年海外協力隊に興味があったから。どんな仕事をしているのかとか、どうゆう風に派遣されるのかとか。それにグループ内でいろいろディスカスするのは、いろいろな人の意見が聞けてよかった。他のグループなど計34名の独自の意見とかがとても興味深かった。自分の考えを言い表すのが苦手でどう説明すればいいのかかわかってもらえるのか考えたりするのもまた勉強になった。久しぶり、頭を

使った。

- ・開発途上国の実態と日本のODAを生徒に真剣に考えさせる良い機会である。

(教師)

- ・今まで具体的な例とか考えたこともなかったし知ることなかったから。
- ・実際の話をもとにしていたのがよかった。私自身は、協力の原地から離れているのでどのような問題が起こっているのかわかりません。また、問題を知るだけではなく、次にどう行動したらいいのか、みんなで考えられたのもよかったです。
- ・実体験をもとに問題の解決法を考えるもので、またいろんな角度から考えなければいけなかったから。
- ・個々の問題についてじっくり考えることができた。(教師)

4. 研修員との交流はどうでしたか？

①大変勉強になった	9
②勉強になった	17
③普通	6
④あまり勉強にならなかった	0
⑤得るものはなかった	0

①及び⑤と答えた人はその理由を教えてください。

- ・もう少し研修員の数が多いとよかったです
- ・色々な体験がきけた。国の状況やおもしろい事や人々の生活など
- ・交流というには少し時間が短かった。彼らにも都合があるだろうが、2日目の夕食も一緒だと良かった。(教師)
- ・研修員の方の国の事がいろいろ聞けたから。楽しかった。
- ・研修員の方々と英語で話している時、自分の英語の無さを痛感させていただいたから。
- ・研修員の人たちはとても積極的にいろんなことを話してくれたし、英語を使ういい機会になったから。
- ・まず、英語が思うように話せなくて、聞き取ったり、話したりするので精一杯で大変だったけど楽しい時間でした。
- ・日頃外国の人と話す機会などほとんどないので楽しかった。又外国の人とかの性格もわかったし、宗教的な違いもあるんだなあと感じた。(食事など)
- ・まず、英語がしゃべれない自分がなさげなかった。英語はとても苦手なのでもう、半分あきらめかけてたけど、かなりヤル気が出た。ぜったい(?)英語をしゃべれるようになるゾイ!!(英語反対派だったけど、英語はやっぱ共通語だと実感した。)
- ・マレーシアの消防関係研修生との英会話及び翌日の消防学校での彼らの研修の様子など、有意義で関連性があった。(教師)
- ・楽しかった～。こんな機会年に1回とないから～
- ・研究員の方も英語を母国語としていなかったので、気負いなく話せてよかった。また、いろんな国の人と一緒に集まっていて、その人の口から直接その国のことが聞けて、現実味があって、よかった。

5. 世界の食事はどうでしたか？

①とてもおいしく食べられた	8
②おいしく食べられた	13
③普通	7
④あまりおいしくなかった	4
⑤食べられたものではなかった	0

(④へのコメント：でも“体験”ということで、それはそれでよかったです。)

6. 研修コース見学ツアーはどうでしたか？

①大変興味深かった	3
②興味がもてた	14
③普通	12
④あまり興味がもてなかった	3
⑤見る価値なし	0

①及び⑤と答えた人はその理由を教えてください。

- ・たしかに面白かったが、半日つぶすまでではなかったかも。(教師)
- ・暑い中、自分の為、自国の為とはいえ一生懸命に学んでいる姿を見ていたら、最近一生懸命になっていない自分が恥ずかしくなった。
- ・猛暑の中でのマレーシア研修生の真剣な研修ぶりと開発途上国の置かれた状況を垣間見ることができた。(教師)
- ・JICAだけでなく、消防訓練校とか、普通の所も関連しているのは初めて知った。以外と知らないところでもっと活動が身近にあるのでは？と思った。

7. 国際協力に携わる人との交流はどうでしたか？

①大変有意義だった	18
②有意義だった	15
③普通	0
④あまり有意義ではなかった	0
⑤得るものはなかった	0

①及び⑤と答えた人はその理由を教えてください。

- ・講師5名の話全部聞いたことがよかった。
- ・現場で働いている人の意見はすごい説得力があり、生き生きとしていてあこがれた。
- ・こんな機会はあまりないしこれから先もあるかどうかわからないから。
- ・実体験はやはり参考になる。(教師)
- ・現地実際にいった人の生の声を聞くことができたので、大変さなどが伝わってきて聞き入ってしまいました。
- ・実体験の話が聞けたから、とても現実味があって興味を持てた。
- ・国際協力というものを、実際にやっている人達からの話、活動を聞けるのは、滅多にない事だから。

- ・ 3日間のプログラムの中で一番心に残った。生の声をきけて楽しかった。
- ・ 現に働いている人の話を直に聞いてよかったです。
- ・ 写真などを見ながら生の声を聞いて、心に訴えるものがあったから。
- ・ 青年海外協力隊などに興味を持っている私にとって、実際に現地で活躍されてきた方々の話を聞く機会は日常ではありえないことだったので、この企画があることがすごくうれしかったです。
- ・ さまざまな関わり方との15分ずつの時計回りの交流は素晴らしい企画だった。惜しむらくはもう少し時間が欲しい。(教師)
- ・ いろいろと(何がいろいろなのか?) 考えさせられましたから。質問もできたし。
- ・ それぞれの人が、それぞれの立場で、そして違った意見を持っていたので、“国際協力”と一既にまとめることはできないと思った。色んな話が聞いてよかったです。
- ・ いろんな形の国際協力があることと、実体験を聞くことができたから。
- ・ 一人ひとりの苦勞がよく分かり、質問も多くてよかった。(教師)

8. JICA 職員の印象はどうでしたか?

①大変感じが良かった	23
②感じが良かった	8
③普通	1
④あまり感じが良くなかった	0
⑤最悪だった	0

①及び⑤と答えた人はその理由を教えてください。

- ・ 皆さん一生懸命でよかったです
- ・ おもしろく、明るくたのしく、ゆかいな人たちだと思ったから。
- ・ 斎藤さんも含めて、国際協力というものに関して、僕たちと同じ目線で話をしてくれ、何よりみんないい人だった。
- ・ 現場(教育の)を理解し、積極的に協力しようという姿勢が感じられたからです。(教師)
- ・ いろいろ親切にして頂き、ありがとうございました。生徒、先生ともに気難しい人達をうまくまとめていた。(教師)
- ・ 食事の時間などにとっても親しげに話して頂き、いろんな話を聞かせてくれました。
- ・ とても話しやすかった。
- ・ 初対面でも気軽に話し掛けてくれたから。
- ・ 腹痛の時に大変お世話になったからです。
- ・ 生徒や教員との距離を感じた。私(教員)もよくないのかもしれませんが、もっと話し合えれば、と思います。(③への回答 教師)
- ・ 笑顔いっぱいだった。
- ・ とっても親切な方々ばかりで、話しやすく、親しみやすかったです!
- ・ 特に若い人とは、気楽に話すことができたと思う。それにしてもあんなに英語が話せるとはスゴイと思った。いい人達でした。
- ・ 話しやすかった。最初は「気楽にはなしかけてください。」といわれて、そんなこ

- とゆわれても・・・と思ったけど、向こうから話しかけてくれたのでよかった。
- こんな shy な私でも、気軽に話しかけたし、とっとも親切、とてもよろしいです。
- ・熱心、誠意がある。企画がすばらしく、事前準備の努力がうかがい知れる。(教師)
- ・その節は失礼しました・・・。さいごのお昼楽しかったです。おもしろくて気さくな方ばかりで(失礼します)本当に良かったです。
- ・質問にもとてもいねいに答えてくれたし、わからないことはすぐに教えてくれて助かったし、何よりおもしろい人たちだった。
- ・“国際協力”をやってあげてるんだ、とかそういういやーな雰囲気がなくてよかった。前向きで明るく、義務とかいう感じはちっともなくて、理想的だな、私も将来こんな風に働きたい、と思いました。
- ・情熱が伝わってきたし、人が好きというのがにじみでていたので。
- ・やさしかったし、しゃべりやすかった。
- ・いい人だったから。通訳してくださって、研修。
- ・落ちつきがあったし、一個人として扱って頂けたので好感が持てました。
- ・一生懸命やっておられる姿勢がよく伝わった(教師)

9. 今回のプログラムに参加して良かったですか?(複数回答あり)

①とても良かった	23
②良かった	10
③普通	0
④あまり良くなかった	0
⑤時間の無駄	0

①及び⑤と答えた人はその理由を教えてください。

- ・プログラムの内容が充実していたし、意欲的な生徒も多くよかった。
- ・とてもよい勉強になったし、考える時間がもてました。
- ・友達ができて良かった。外国の方と話せて良かった。
- ・いろいろな人と出会えた。
- ・普段は考えないことについて考えさせられたから。貧困についてなど・・・
- ・いろんな体験ができ、勉強になり、これから進路を決めていく上でとても参考になったから。
- ・生徒にとって、学校にとって、JICAにとって、プラスになったと思う。(教師)
- ・国際協力に興味を持つ事ができるようになったし、とても知識が増えました。
- ・国際協力に興味もてたから。
- ・他校の生徒の考え方がどういふのが分かるし、いつもとは違う人達と話す事が出来たのが新鮮に感じ、面白かったから。
- ・いろいろなことが分かり、とても楽しかったからです。
- ・3日間、すごく楽しく過ごすことができたし、たくさんのプログラムのおかげ自分の考えが変わった。(よい方へ)
- ・いろんな人の考えなどが聞けて、周りからの影響を受けた部分っていうのはすごく大きいし、本当に貴重な時間でした。友達がいっぱいできたのもすごくうれしいです!!楽しかったあー!!

- ・まず色々な人と会えてよかった。普通ではいえないような意見がたくさん言えたり、聞いた。みんなと、すぐ話せる雰囲気があった。こんなの初めてだった。
- ・友達がいっぱいできた。こうゆうことにますます興味がわいてきたし、英語への興味(?) 関心(?) もわいてきた。
- ・全般に有意義、とても良かった。もっと多くの生徒(若者)に、このような素晴らしいプログラムに参加できると良い。(教師)
- ・たまたまが重なって参加できたこともあって良かったな〜って気持ちも倍の倍の倍くらい(いえ、もっと・・・)あります。
- ・いろいろな話もきけたし、いろんな国の人も話ができてよかった。課題を本当に真剣になって考えられた。
- ・仲間がいたこと。本気で話しても、たとえ意見が合わなくてもだれもバカにしたりしなかったこと。何もためらうことがなかったので、スイスイ自分の意見が口をついて出た。また、当センターのようなものがあるって、実際の中身はどんなのかとかわかってよかった。
- ・自分が普段考えないようなことを考える機会をもてたから。
- ・他校との交流や国際理解に関して深く知ることができた。(教師)

10. 今後このようなプログラムに参加しようと思いますか？(複数回答あり)

- | | |
|--------------|----|
| ①必ず参加しようと思う | 10 |
| ②機会があれば参加したい | 21 |
| ③わからない | 2 |
| ④参加したくないと思う | 0 |
| ⑤絶対に参加したくない | 0 |

①及び⑤と答えた人はその理由を教えてください。

- ・教員、生徒とも良い体験ができた
- ・楽しかったから。他国の料理が食べられた。さまざまな国の状況が分かった。
- ・せっかくのご縁をムダにしたくないし、このまま放っておけない分野だと思っています。(教師)
- ・今回で出来なかったことをもし機会があれば、次回に活かしたい。(教師)
- ・とても勉強になったので、このような機会が増えればいいなと思った。
- ・いろいろな人達と会って自分の考えの視野を広げたいし、いろいろな人達と出会うのが面白いと今回ので感じた為。
- ・今回あったプログラムのようなものなら是非に！こんな楽しいのは本当に好き。人の意見聞くのもいうのも好きだし、外国にも興味あるから。
- ・来年も健康なら、是非別の生徒を引率したい。(教師)
- ・ここだけの話。(伊勢高校は今年限りなのではないでしょうか・・・？そりゃそうですね・・・)自分のためにめっちゃめっちゃなるからです！他にもいろいろ知りたいし。
- ・教師・学生ともに参考になった。(教師)

11. その他何かありましたら記入して下さい(改善点、今後やってほしいプログラムなど。)

- ・①前回参加した時は、JICA 事業の説明があったので、今回は生徒に JICA とはどのようなことをやっているのかあまり説明をせず、少し後悔しています。確かに JICA 事業の説明が入るとかた苦しくなりそうですが、5分か10分くらいの説明があってもいいかな、と思います。②他校の国際交流の取り組みの発表はあるとよいと思う。今回は先生方と個人的に話をするなか、または懇親会等で少しきけたが、他校がどのような方法でどんな活動をしているかというのは、教師側としてもとても聞きたいことである。③ケーススタディの発表、ディスカッションの時、教師がどの程度発表してよいか迷った、などなど。でもとても良いプログラムでした。
- ・国際協力について考えるよいチャンスでした。国際協力が少し身近に感じることができて、これも少しの進歩かなと思います。3日間お世話になりました。ありがとうございました。
- ・研修員との交流に関して、夕食会では雑談程度だったので、いずに座ってゆっくりと話をしたかった。
- ・国際協力に携わる人ともっとゆっくり話したかった。
- ・もう少し、NGOの人や青年海外協力隊の人達と話す時間が欲しかったです。どっちかという、消防署へ行く時間を短くして、こっちを長くしてほしかったです。こんな機会はめったにないし・・・。(でも、5人の人たちを試みれば長くて疲れたかもしれませんが) それか、話の終わった後、個人的に彼らと話せるような自由時間(30分~1時間くらい)があればいいと思います。
- ・国際協力に携わる人との交流の時間拡大。昼食も一緒に。(教師)
- ・研修員との食事会をもう一回。(教師)
- ・生徒同士で遊ぶ機会をプログラムに組む。(教師)
- ・“~宣言” “~憲章”(ちっぽけな高校生らしいものでいいです)を毎年作って、県内の高校へ発信、マスコミを使う。(教師)
- ・学年制限はいらなと思います。
- ・もっと自由時間がほしかったけど、プログラムの内容は大変よかったです。
- ・改善点として、ケーススタディーの時間が少し長かったような気がした。また、他の学校の生徒、先生同士との交流する時間が欲しかった。今後も国際協力に携わる人と話す機会があればいいと思う。今回のプログラムは、自分にとっていろいろな知識をつけるよい機会になったので、よかったです。
- ・ケーススタディの設問が多く感じられました。ありがとうございました!
- ・もっと遊び感覚の企画もあればよかった(ゲームとか)
- ・もうすこし、交流の時間として自由時間がほしかった。本当に貴重な体験だったと思います。このような機会に参加できたから、(今までの)自分の考えを伝えることができ、また、周りの人の考えを聞くことによって新たな気持ちを持つことができました。少しでも多くの人に私と同じようなよい体験をしてほしいから、このようなプログラムは続けていってほしいです。ありがとうございました。
- ・国際協力に携わる人との交流会は、時間が短くて急ぎ足になってしまい、じっくりと話を聞いたりできなかったのが残念でした。もう少し時間があったらよかったです!!

- ・ ケーススタディは自分達でしっかり考えることでよかったと思う。だけど問題数が多かったり難しかったりでもう少し余裕のある時間配分ならいいんじゃないかな。それとグループ分けでやるのはよいのですが、もっと全員と話せる又、ふれあえる機会があった方がいいんじゃない？僕としては他の時間に結構話せたと思うんですが、やはり話しかけにくかったり、そういうのが苦手な人もいるかもしれないから機会を増やすべきだと思う。それかもっと自由時間を増やしてほしい。短い限られた時間だからもっと色々話したい！！日数としてはこの位でちょうどいいと思う。できるならもう1日あったほうがうれしいです。今回のプログラムで友達もできました。学年関係なく話せました。すごくいい思い出になりました。
- ・ まず1つ改善点は2日目の昼食の時の飲み物を……。インドのチャイとかの“世界の飲み物！”でも、水道水でもいいので水分を！ジャガイモはつまるし。あともっとゲームがしたかった。できたらもう少し研修員の人との交流がほしかったです。（一緒にゲームしたり。）本トにこの3日間楽しかったです。ありがとうございました。今年の夏の1番の思ひ出になりました。たった3日間（2日間）だったけど、友達がたくさんできたし、知らないコトをいっぱい知ることが出来たし、夏休みで1番充実した3日間でした。来年も機会があればまた来たいです。本当にただやかましいだけの娘でしたが、心あたたくしていただいて、うれしかったです。近くなのでまた、暇を見つけて行くかもしれないので、その時は、中に入れて下サイ……。笑）この3日間忘れることのできない大切な思い出で、そして私の出発点になると思います。こんな私をどうもありがとうございましたっ！！
- ・ ありがとうございました。別紙レポートにその他の点については述べてあります。
（教師）
- ・ もう少し、皆（誰とでも）が交流できるような時間（もしくはプログラム）があったらいいなと思った。
- ・ 全然文句はないのですがちょっと過密スケジュールやったかな？？っていうぐらい。楽しかったからそんなのあんまり気にならんかったけど。皆様失礼な発言や行動、失礼いたしました。アンケートもかわいかったです。これからもこんないいプログラムつくってください。
- ・ 国際協力に携わる人と、もっと話したかった。〈野口さんと石井さんへ〉プログラムの後半になってから、まだ入社早々なのだと聞いてびっくりしました。あまりにすばらしいプログラムだったんで。石井さんの“JICAの中身を本当に知りたくて入社した。”“JICAも迷いながら開発している。”というのを聞いて感銘を受けました。中に入らないとわからないことってありますよね、私も同じようなことを考えています。あと、もしあのおとき、私たちがやっていることは絶対正しいとか言ったら、今回のプログラムで私が出たものは半減していたかもしれない。今回のプログラムを終えて、現状を必ずしも正しいとはせず、広い視野を持って、今がいいのならさらによくなるようにと考えていくことがすごく大切だと思いました。ありがとうございました。（うーん、感想とよく似ているかも）
- ・ 時間をかけて名古屋まで行ったかいがありました。友達もたくさんできたのでうれしかったです。内容的にはよかったと思います。（とくにグローバルビンゴ）ま

た今回のようなプログラムを実施すればいいと思います。

- ・ 報告書に書いてある通りですが、教師・学生ともに参考に、刺激になりました。学生たちの反応もよく、楽しかったようです。色々な形で JICA や国際理解について広めていきたいと思っています。ありがとうございました。(この線の引き方は書きにくいです) (教師)

高校生国際協力実体験プログラム 評価会要約

JICA 中部国際センター

1. 実施体制について

- 1) 今回総務課・業務課共同で企画段階から実施したが、この体制は良かった。
→来年度もこの体制を続行したい。
- 2) 両課共同で実施したものの、センター全体としてのサポートが弱かった。

2. プログラムの内容について

- 1) 高校生対象なので、講義の内容や方法等工夫する必要がある。
- 2) 事前学習
 - ・実施したのは良かった。
 - ・しかし、事前学習のプログラム実施中のフォローが少なかった。
 - ・事前学習をして、プログラム体験後貧困に対するイメージがどう変化したか、その意味が分かりにくい。
 - ・発表の際に意見発表させる工夫をすべき。

3) 開講式

- ・職員が横に一列に並ぶと、生徒が緊張するためよくない。並ぶのであれば、後ろに少しずつ並ぶ。

4) ケーススタディ

- ・グループ毎に実施側の意図を組み込んだ答えが返ってきた。
- ・題材を身近なものにした方がよい。
- ・高校生には難しい。(文章を読み切れない、内容が分かりにくい)
- ・ケーススタディの目的は考えさせて意見発表させることと、援助の多面性を知ってもらうことにある。このことを良く認識すべき。
- ・題材を他のセンターに問い合わせるなどして、探す必要がある。
- ・ビデオを見てからケーススタディをした方が、イメージがわきやすくないか。
- ・教師をケーススタディに参加させると、生徒が意見を発表しにくい、教師の意見に生徒が強く影響されすぎる、などの問題が発生する。
- ・→来年度は教師を参加させず、教師への宿題を事前に出し、別プログラムを
- ・組むなどの配慮も必要

- ・グループワークが夜間まで及び、生徒に負担がかかりすぎる。
- ・→日中によりグループワークのための時間をとる必要がある。
- ・まとめシートを発表前に配ると、聞く側はそれを見ながら聞いてしまうため、発表後に配るべき。
- ・ディベートをとりいれてはどうか。

5) 研修員との食事会

- ・グループ毎に固めないと、生徒は恥ずかしがる人もおり研修員との交流がスムーズにいかない。
- 前半にグループ毎に研修員を配置し、話をしてもらい、後半はご飯を食べてもらうことにしてはどうか。

6) 世界の食事体験

- ・おなかやすいていたこともあり、生徒はとりあえず食べることに集中し、料理の説明をあまり聞いていなかった。
- ・注意を食事の内容に引きつけるためにも、空間を演出する必要がある。
- 例：音楽をかける、衣装を着る、JOCVOB や研修員に説明してもらう。

7) 研修コース見学について

- ・息抜きになるので、あった方がよい。
- ・見学して帰宅した後にジュース（あるいは各国の飲み物）を出すといい。

8) 国際協力に携わる人と話そう

- ・協力隊、コーディネーター、NGO、年齢、性別などのバランスを考慮して人選すべき。

9) まとめ

- ・1人1人の1分スピーチは、話せず困る生徒もでるか心配したが、皆自分の言葉で発表しており良かった。
- ・プレゼントの絵はがきは好評であった。
- ・プログラムの締めとして議論させた方がよい。学校毎に集まり、事前学習をふりかえってはどうか。

10) その他

- ・グループワークが夜間に及んだこともあり、2日目の朝は生徒は眠そうだった。

- 2 日目の朝にゲームを入れて眠気を覚ましてはどうか。
- ・2 日目の夜の自由時間は必須である。「国際協力に携わる人と話そう」に参加した外部講師が残ると良い。

3. 実施時期について

- 1) 生徒が比較的移動しない、お盆直後がよい。
- 2) 研修員の在館状況は4月に判明するので、在館状況を確認後に実施日を決定する。

4. その他

- 1) 研修コースのように終了証明書を作成してはどうか。
- 3) 風邪等の疾病はCBICが手配する保険でカバーされないので、健康保健証のコピーを参加者に持参させる。

来年度への改善に向けて

JICA 中部国際センター

1. 実施体制について

- 1) センター全体としての当プログラムへのサポートを強化する。

2. プログラムの内容について

- 1) 講義内容や方法等を高校生対象ということを念頭に置き工夫する。
- 2) 事前学習をプログラム中にフォローする日程づくりを行う。
- 3) 発表の際に高校生の意見発表をさせる工夫をする。
- 4) 開講式の際の職員の並び方は、後ろに少しずつ並ぶ方法をとる。
- 5) 初日に JICA 事業の説明を入れる。
- 6) ケーススタディの題材を他センターにも問い合わせをもっと探す。
- 7) ビデオを見てからケーススタディを実施する方法も検討する。
- 8) 教師の位置づけをしっかりと考え、教師対象のプログラムを生徒のものとは別に組むことも検討する。
- 9) 日中によりグループワークのための時間をとる。
- 10) ケーススタディのまとめシートを発表後に配る。
- 11) 研修員との食事の際には、研修員と高校生が話しをしやすい方法を工夫する。
- 12) 世界の食事体験の際には、目的をはっきりさせ、目的達成のための空間を演出する。
- 13) 研修コース見学してセンターに帰った後に飲み物を出すなど、暑さへの配慮をすべきである。
- 14) まとめ会の際には、学校毎に集まり、事前学習を振り返ることを検討する。
- 15) 「国際協力に携わる人と話そう」に出席した講師とより長い時間交流することを検討する。
- 16) 2日目夜の自由時間をもう少し長くするために、その前のコマを早めに終わらせることを検討する。
- 17) 研修員とより交流してもらうために、長期研修員の話も入れる。
- 18) よりゲームを取り入れる。

4) その他

- 1) 健康保険証のコピーを参加者に持参させる。

資料編

JICA 中部国際センター

書籍・パンフ在庫リスト

JICA中部国際センター

書籍	タイトル	著者
	ジャーナリストが歩いて見たODA	杉下 恒夫
	一万人の国際大学	青木 公
	甦る大地セラード	青木 公
	OBIはつらいよ	青木 公
	ODA最前線	青木 公
	中高年はつらつと海を渡る	青木 公
	国際緊急援助最前線	和田 章男
	「自助」への協力	笠原 昌平
	途上国と健康	戸松 成
	パトスの旅へ	中垣 長睦
	技術移転考	平井 慎介
	国際保健医療協力入門	小早川 隆敏
	援助は役立っているか?	ハート・カウ
	M.トダロの開発経済学	マウロ・P・トダロ
	ODA アジアで開く未来への扉	国際協力推進協会
	わかる みつかる できる	内外学生センター
	経済協力参加への手引き	外務省
	国際協力ガイド99年版	国際開発ジャーナル社
	国際協力ガイド2000/2001	国際開発ジャーナル社
	国際協力の基礎知識	JICA
	アリンゴと日本のママ	国際協力推進協会
	アキラ先生の国際協力物語	国際協力推進協会
	マンガODA物語 パート2	国際協力推進協会
	中学生エッセイコンテスト'99 優秀作品集	JICA
	高校生エッセイコンテスト'99 優秀作品集	JICA
	高校生エッセイコンテスト'98 優秀作品集	
	高校生エッセイコンテスト'97 優秀作品集	
	国際協力研究 大学生論文コンテスト	JICA
	平成11年度ODA民間モニター報告書	JICA
	いま私たちにできること	JICA
	中学生エッセイコンテスト'99作品集(東海地区編)	JICA
	中学生エッセイコンテスト'98作品集(東海地区ブロック編)	JICA
	中学生エッセイコンテスト'97作品集(東海地区ブロック編)	JICA
	高校生エッセイコンテスト2000作品集(東海地区版)	JICA
	高校生エッセイコンテスト'99作品集(東海地区版)	JICA
	高校生エッセイコンテスト'99作品集(四国支部編)	JICA
	高校生エッセイコンテスト'98作品集(東海地区ブロック版)	JICA
	授業に役立つ総合学習の手引き(平成11年度中学校教師海外研修に参加して)	
	授業に役立つ総合学習の手引き(平成11年度高校教師海外研修に参加して)	
	授業に役立つ総合学習の手引き(平成10年度高校教師海外研修に参加して)	
	平成11年度高校生国際協力実体験プログラム参加者レポート	
	平成10年度高校生国際協力実体験プログラム参加者レポート	
	平成10年度高校生国際協力実体験プログラム参加者レポート(教師用)	
	国際協力を読む	JICA
	国際協力NGOダイレクトリー-2000	JANIC
	パンフレット	
	中部国際センター (B5版)	
	アクセス 国際協力	*
	地球の明日を見つめて-日本語-	
	地球の明日を見つめて-英語-	*
	JICA-世界に生かす優しさと強さ-	*
	JICA研修施設概要 平成10年度	

HELLO! JICA《視聴覚広報資料のご案内》	*
出会ってみよう！やってみよう！国際協力 市民参加の手引き	JICA
For Tomorrow's Leaders-ひとを育てるJICAの研修事業- 日本語	JICA
For Tomorrow's Leaders-ひとを育てるJICAの研修事業- 英語	JICA
青年招へい事業-日本語-	JICA
青年招へい事業-英語-	JICA
GROW UP-青年招へい事業の風に吹かれて-	CBIC
WID 開発と女性	JICA
国際緊急援助体制とJICA	JICA
途上国での事業を支援します 長期・低利な融資制度	JICA
新たな時代のODAをめざして 日本の援助	JICA
新たな時代のODAをめざして 日本の援助 (英語版)	JICA
ODA 日本の政府開発援助	外務省
ODA 日本の政府開発援助 (英語)	外務省
アフリカに対する日本の援助	
とびだそう！世界へー青年海外協力隊ー	
現職参加制度の案内	
国際協力と開発教育	
e-cooperation	JICA
JICA Y El Sistema Japonés de Auxilio Emergente al Desastre	JICA
Système de Secours d'urgence International et JICA	JICA
JICA in Africa	JICA
Technology and Development/1999/Jan	
Technology and Development/2000/Jan	
JICA INFO-KIT ODA と JICA 日本語	JICA
JICA INFO-KIT ODA and JICA 英語	JICA
JICA INFO-KIT JICA事業概要 日本語	JICA
JICA INFO-KIT JICA事業概要 ロシア語	JICA
JICA INFO-KIT 新生JICA	JICA
JICA INFO-KIT ASEAN	JICA
JICA INFO-KIT 中国・韓国	JICA
JICA INFO-KIT 内陸アジア地域	JICA
JICA INFO-KIT 南西アジア	JICA
JICA INFO-KIT 大洋州	JICA
JICA INFO-KIT 中米・カリブ	JICA
JICA INFO-KIT 南米	JICA
JICA INFO-KIT アフリカ	JICA
JICA INFO-KIT 中東 日本語	JICA
JICA INFO-KIT 中東 英語	JICA
JICA INFO-KIT 欧州 日本語	JICA
JICA INFO-KIT 欧州 英語	JICA
リーフレット	
シニア海外ボランティア	JICA
WHAT IS JICA?	*
中部国際センター 人造り 国造り 心のふれあい	CBIC
青年海外協力隊	大
	小
Global Issue Gender WID	JICA
JICA in East Timor	JICA
開発パートナー事業	JICA
定期刊行物	
JICAフロンティア (月刊)	JICA
クロスロード (月刊)	JICA
国際協力 (月刊)	
国際開発ジャーナル (月刊)	
国際協力研究 (月刊)	
Spring Board	

世界の動き (月刊)	
国際協力プラザ (月刊)	国際協力推進協会
Network(英語)	
海外移住 (月刊)	
その他資料	
国際協力事業団年報 1998年度 (日本語)	JICA
国際協力事業団年報 1998年度 (英語)	JICA
国際協力事業団年報 1998年度 (スペイン語)	JICA
国際協力事業団年報 1999年度 (日本語)	JICA
国際協力事業団年報 1999年度 (英語)	JICA
国際協力事業団年報 1999年度 (フランス語)	JICA
国際協力事業団年報 1999年度 (スペイン語)	JICA
国際協力事業団年報 2000年度 (日本語)	JICA
JOCV NEWS 縮刷保存版1991-1995	
JICAニュースファイル1999	
多様化するNGO活動! -地方自治体のNGO連携及び支援体制-	
NGO-JICA相互研修報告書	
にほんご (フランス語版)	
にほんご (スペイン語版)	
にほんご (中国語版)	
にほんご (ラオス語版)	
にほんご (インドネシア語版)	
にほんご (ミャンマー語版)	
にほんご (ヴェトナム語版)	
にほんご (タイ語版)	
にほんご (カンボディア語版)	
にほんご (マレーシア語版)	
青年招へい事業 交流手帳 ASEAN編	
青年招へい事業 交流手帳 アフリカ諸国編	
Guide to Training in Japan 2000(JICA)	
青年招へい事業 ホームステイの手引き	
日本の生徒たちへの手紙	
高校生エッセイコンテスト'99優秀作品集ダイジェスト版	
平成11年度高校教師海外研修開発教育授業実施実例報告	
青年海外協力隊OB・OG体験談	
平成13年度(前期) ボランティア調整員応募のためのガイド	
派遣専門家登録制度のご案内	
JOCV試験問題	
Japan's Official Development Assistance Annual Report 1999	外務省
Japan's Official Development Assistance Annual Report 1998	外務省
Japan's Official Development Assistance Annual Report 1997	外務省
Japan's official Development Assistance Summary 1998	外務省
チラシ	
中学生国際理解教育モデルプラン	
青年海外協力隊派遣国シリーズ2000 (バングラデシュ)	
JICAサーモン・キャンペーン	

注 *印は絶版

東海3県各種ボランティアパネルリスト

JICA中部国際センター

三重県						
氏名	区分	隊次	派遣国	職種	留守宅	
勝矢 眞美	シニア	10-0	ザンビア	窯業	伊勢市	
水谷 昌江	協力隊	10-2	ジョルダン	養護	亀山市	
繁田 恭治	協力隊	10-2	パラグアイ	小学校教諭	上野市	
吉川 拓也	協力隊	10-3	ザンビア	農業土木	四日市市	
福永 純子	日系青年	11-0	ブラジル	日本語教師	津市	
小林 真理子	協力隊	11-1	パラオ	看護婦	伊勢市	
濱嶋 まゆ	協力隊	11-1	インドネシア	看護婦	四日市市	
吉田 準	協力隊	11-2	ジョルダン	作業療法士	津市	
伊藤 郁太郎	協力隊	11-3	マラウイ	野菜	四日市市	
倭 章浩	協力隊	11-3	バングラデシュ	自動車整備	四日市市	

愛知県						
氏名	区分	隊次	派遣国	職種	留守宅	
中村 史絵	協力隊	9-2	ポーランド	卓球	知多市	
平泉 宣久	協力隊	10-2	パプア・ニューギニア	自動車整備	一宮市	
中村 眞美	協力隊	11-1	シリア	保育士	名古屋市緑区	
伊藤 由希子	協力隊	11-2	トンガ	体育	岡崎市	
島田 かおり	協力隊	11-2	ケニア	陶磁器	春日井市	
山本 祐子	協力隊	11-2	マーシャル諸島	小学校教諭	刈谷市	
川村 真紀	協力隊	11-3	セネガル	看護婦	丹羽郡大口町	
組田 友紀子	協力隊	11-3	バングラデシュ	家畜飼育	尾張旭市	
渡辺 堅二	協力隊	11-3	タンザニア	理数科教師	名古屋市 中川区	
坂井 純	協力隊	12-1	ボリヴィア	小学校教諭	名古屋市 緑区	
梶川 俊雄	日系シニア	12-0	メキシコ	日本語教師	尾張旭市	

岐阜県						
氏名	区分	隊次	派遣国	職種	留守宅	
古田 敦子	日系青年	9-0	ブラジル	ソフトボール	岐阜市	
杉原 慶樹	協力隊	10-1	ミクロネシア	養殖	揖斐郡大野町	
堀 徳治	シニア	10-0	インドネシア	縫製	岐阜市	
米山 陽子	協力隊	10-2	ケニア	婦人子供服	大垣市	
沖館 泰賢	協力隊	11-3	ザンビア	料理	美濃加茂市	

JICAフォトコンテストパネルリスト

JICA中部国際センター

管理NO	内容	部門	画題	撮影国	備考
11P01	1999年	国際協力	comme ca (コムカ)	セネガル	特選
11P02	"	国際協力	ありがとう又来てね!	ネパール	準特選
11P03	"	国際協力	初体験	ブータン	準特選
11P04	"	国際協力	診察は木陰の下で	ブラジル	入選
11P05	"	国際協力	ここを直そう!	マラウイ	入選
11P06	"	国際協力	バイクに乗って	インド	入選
11P07	"	国際協力	ウェルカム!!ジャパニ!!	ネパール	入選
11P08	"	国際協力	友達	日本	入選
11P09	"	一般	露天商	モンゴル	特選
11P10	"	一般	鶉飼い船	中国	準特選
11P11	"	一般	踊りの合間にて	インドネシア	準特選
11P12	"	一般	祖母と一緒に	ヴィエトナム	準特選
11P13	"	一般	朝の水汲み	ミャンマー	入選
11P14	"	一般	青年	ヴィエトナム	入選
11P15	"	一般	昼下がり	タイ	入選
11P16	"	一般	ウイグルの陽気な老人	中国	入選
11P17	"	一般	TAKE A REST	台湾	入選
12P01	2000年	国際協力	老人ホームでの交流	日本	特選
12P02	"	国際協力	ネパール・ブータン難民キャンプ 眼鏡寄贈プロジェクト	ネパール	準特選
12P03	"	国際協力	「台湾九二一地震」国際援助	台湾	準特選
12P04	"	国際協力	in save?i・ガ (わかるかな?) こんな風に	ソロモン諸島	準特選
12P05	"	国際協力	大西洋の鯛	フランス	入選
12P06	"	国際協力	青空教室	ヨルダン	入選
12P07	"	国際協力	御田植祭の外人さん	日本	入選
12P08	"	国際協力	何して遊ぼうか?	カンボジア	入選
12P09	"	国際協力	同い歳	中国	入選
12P10	"	一般	新世紀に入って	中国	特選
12P11	"	一般	つかまえた	スリランカ	準特選
12P12	"	一般	にぎやかな「元宵節」	中国	準特選
12P13	"	一般	僕が隊長だ!	ユーゴスラビア	準特選
12P14	"	一般	ダーク川近くに住んでいる子どもたち	ベトナム	入選
12P15	"	一般	孫と遊ぶ	中国	入選
12P16	"	一般	収穫①	中国	入選
12P17	"	一般	水くみの少女	インド	入選
12P18	"	一般	帰路	ミャンマー	入選

所蔵ビデオリスト

JICA中部国際センター

No.	タイトル	制作年	備考
1	地球の明日を見つめて -JICAは今-	1991	アネックス
2	JICA最前線	1992	アネックス
3	それぞれの地平線	1996	
7	海外事業へのチャレンジ 社会開発編	1991	
7	海外事業へのチャレンジ 農業開発編	1991	
7	海外事業へのチャレンジ 林業開発編	1991	
7	海外事業へのチャレンジ 鉱工業開発編	1991	アネックス
10	シリーズ地球人 -青年海外協力隊アフリカ編-	1999	
11	シリーズ地球人 -無償資金協力アフリカ編-	1999	2本あり
	シリーズ地球人 -無償資金協力アフリカ編- 英語版	1999	
	シリーズ地球人 -無償資金協力アフリカ編- フランス語版	1999	
12	シリーズ地球人 -無償資金協力アジア編-	1999	2本あり
	シリーズ地球人 -無償資金協力アジア編- 英語版	1999	
	シリーズ地球人 アフリカの明日を見つめて	1999	
	" (英語版) People of the Earth For the Future of Africa	1999	
13	世界へ扉を開けて -総合編-	1996	アネックス
14	世界へ扉を開けて -事例研究/国内事業編-	1996	アネックス
15	世界へ扉を開けて -事例研究/海外事業編-	1996	アネックス
16	JICA医療協力最前線	1994	アネックス
17	JICA医療協力最前線その2 -ラオスポリオ根絶編-	1996	
18	世界への貢献 -国際緊急援助隊(JDR)-	1994	アネックス
20	この手で未来を -ケニアの女たち-	1992	アネックス
21	私たちのビデオレポート -国際協力の現場から-	1994	アネックス
30	メラピ火山の麓の村で インドネシアの砂防	1985	
33	カトマンズとその周辺 -JICAプロジェクトを中心に-	1995	
36	ネパール家内工業育成技術	1995	
37	ネパール村落振興・森林保全プロジェクト	1995	
38	ネパール淡水魚養殖計画	1995	
39	ネパール園芸開発計画フェーズII	1995	
43	青年海外協力隊	1993	アネックス
45	光と風の大地で	1991	アネックス
47	自立発展という名の木を植えよう	1992	アネックス
48	舞台はアフリカ!青春謳歌	1988	アネックス
51	この人々とともに	1990	アネックス
66	架け橋をささえて -日系社会青年ボランティア-	1997	アネックス
72	開発途上国ってどんな国? -小さな友情から、大きな夢へ-	1990	アネックス
73	JICA24時間 -改訂版-	1986	アネックス
86	JICA投融資制度 -利用企業を訪ねて-	1991	
93	モンクット王工科大学ラカパン -ある人づくり援助の30年-	1993	
94	永遠にナイルと	1984	
95	砂漠と水と生命 -マリ共和国地下水開発-	1983	
104	JAPAN TODAY	1995	
	New Horizons for All-JICA and International Cooperation Today	1997	
	アジア情報交差点 特集カンボジア 国家再建への課題	2000	
	バイバイポリオ (ラオスとバングラデシュのJICAのポリオ対策)		
	世界みんなの笑顔のために-国際協力と日本- (開発教育教材小学6年生向け、副読本付)	2000	
	ODAってなんだろう? 政府開発援助の現場から (開発教育教材中学生向け、副読本付)	1998	
	21世紀に向けて ~明日を見ずえたODA~	1997	アネックス
	アフリカの人々と共に ~日本のODA活動~	1998	
	小泉今日子 ヒマラヤの赤い自転車	1993	
	子供たちの未来のために ポリオ根絶をめざして バングラデシュ	1996	
	もっと輝きたい日のために ~シニア海外ボランティアの人々~		
	国際緊急援助隊JDR(10分) / 世界への貢献 改訂版 (21分)		

シリーズ地球人 技術と文化の架け橋 専門家編	1999
それぞれの地平線 国際協力は今・・・	1996
出会ってみよう！やってみよう！国際協力 ～市民参加の手引き～	1999
海を渡るボランティア 定年後の夢 2000.8.2放送 (NHK)	2000
よみがえれ、マングローブ 海の森づくり (東京海上火災保険作成)	2000
地球家族 JICA REPORT 2000年1月分	2000
地球家族 JICA REPORT 2000年3月分	2000
地球家族 JICA REPORT 2000年4月分	2000
地球家族 JICA REPORT 2000年5月分	2000
地球家族 JICA REPORT 2000年6月分	2000
地球家族 JICA REPORT 2000年7月分	2000
地球家族 JICA REPORT 2000年8月分	2000
地球家族 JICA REPORT 2000年9月分	2000
地球家族 JICA REPORT #13 平和構築とJICAの取り組み	2000
地球家族 JICA REPORT #14	2000
地球家族 JICA REPORT #15 地域に根ざした医療援助を	2000
地球家族 JICA REPORT #16 バックマイ病院プロジェクト	2000
地球家族 JICA REPORT #17	2000
地球家族 JICA REPORT #18 フェエ市児童福祉総合支援	2000
地球家族 JICA REPORT #19 農業の明日を見つめて	2000
地球家族 JICA REPORT #20 エジプトの環境を守る専門家たち	2000
地球家族 JICA REPORT #21 人と人 自然と人 インドネシア	2000
地球家族 JICA REPORT #22 この目で確かめるODA	2000
地球家族 JICA REPORT #23	2000
地球家族 JICA REPORT #24 紅海を守る サウジアラビア	2000
地球家族 JICA REPORT #25 海を越えた柔道家	2000
地球家族 JICA REPORT #25 洪水の傷跡に戻った笑顔が「ベ」が医療チーム	2000
地球家族 JICA REPORT #28 KO-BAN	2000
地球家族 #28 地震災害救済2週間の活動報告	2000
地球家族 JICA REPORT 7/26放送 世界で一番新しい国 東チモール	2000
地球家族 7/23放送 実りある国際消防協力のために	2000
地球家族 JICA REPORT 7/26放送 国際協力の輪を広げる	2000
地球家族 JICA REPORT 8/6放送 農業専門家の見た東チモール	2000
地球家族 JICA REPORT 8/13OA	2000
地球家族 JICA REPORT 8/20OA ケニア 難民キャンプからの報告	2000
地球家族 JICA REPORT 8/27放送	2000
地球家族 JICA REPORT 8/27OA キャラなし 湿原を守るために ～釧路・湿地保全	2000
地球家族 JICA REPORT 9/10OA 和平復興に向けて	2000
地球家族 JICA REPORT 9/17OA	2000
地球家族 JICA REPORT 9/24OA 砂漠に緑をニジェール	2000
地球家族 JICA REPORT 8/27OA タンザニア農業を支える	2000
地球家族 JICA REPORT 10/15OA	2000
地球家族 JICA REPORT 10/8OA エイズの脅威と闘う	2000
地球家族 JICA REPORT 10/22OA 国際協力の現場で	2000
地球家族 JICA REPORT 10/29OA	2000
地球家族 JICA REPORT 牛にお灸	2000
地球家族 JICA REPORT 11/12OA シリアの養護施設を訪ねて	2000
地球家族 JICA REPORT 11/19OA 多彩な国際協カイベント	2000
地球家族 JICA REPORT 11/26OA フィリピンに飲める水を	2000

*上記のビデオは開発教育・広報担当者に対し全て無料で貸し出してあります。

貸し出しを希望される方はお気軽にご連絡下さい。

*備考欄に「アネックス」とあるものについては、中部国際センターアネックスで所蔵しているため、当センターですぐにご覧になることはできませんのでご了承下さい。

JICA が実施する開発教育関連行事

募集テーマ	中学生エッセイコンテスト	高校生エッセイコンテスト	国際協力大学生論文コンテスト	中学・高校教師海外研修	高校生国際協力実践プログラム
<p>次の世代を担う中学生、高校生を対象に、日本と開発途上国との関係、国際社会の中で日本の果たす役割、また、自分たちができる国際協力などについて考えしてもらうことを通じて、将来の国際協力に対する理解を深め、参加者の育成を図るものです。テーマは自由です。</p>	<p>1) 6月現在、中学生であること。 2) 個人・学校単位どちらでも応募できます。 3) 作品は未発表であるものに限ります。 4) 著作権は応募者である JICA に帰属するものとし、作品の返却はしません。</p>	<p>1) 4月現在、高校生であること。 2) 個人・学校単位どちらでも応募できます。 3) 作品は未発表であるものに限ります。 4) 著作権は応募者である JICA に帰属するものとし、作品の返却はしません。</p>	<p>1) 9月15日現在、大学学生課程もしくは修士課程に在籍の方。 2) 日本在住であれば国籍は問いません。海外から応募する場合は日本国籍の方に限らせていただきます。 3) 論文の二重投稿は認めません。卒業論文をベースとした論文も受け付けます。 4) 著作権は著者に帰属します。</p>	<p>1) 中学・高校教師であること。 2) 将来もしくはクラブ活動で開発教育を実践されている方。 3) 健康であること。 4) 年齢50歳以下であること。 5) 所属する学校長の推薦が得られる方。 6) 参加枠は、中学教師約20名、高校教師30名です。</p>	<p>多感で学習意欲が旺盛な高校生を対象に、JICA が実施する技術研修員受入事業を中心とする国内の国際協力事業の現場を体験することにより、国際協力に対する理解を深めることを目的として実施されます。</p>
応募資格・条件等	<p>1) 6月現在、中学生であること。 2) 個人・学校単位どちらでも応募できます。 3) 作品は未発表であるものに限ります。 4) 著作権は応募者である JICA に帰属するものとし、作品の返却はしません。</p>	<p>1) 4月現在、高校生であること。 2) 個人・学校単位どちらでも応募できます。 3) 作品は未発表であるものに限ります。 4) 著作権は応募者である JICA に帰属するものとし、作品の返却はしません。</p>	<p>1) 9月15日現在、大学学生課程もしくは修士課程に在籍の方。 2) 日本在住であれば国籍は問いません。海外から応募する場合は日本国籍の方に限らせていただきます。 3) 論文の二重投稿は認めません。卒業論文をベースとした論文も受け付けます。 4) 著作権は著者に帰属します。</p>	<p>1) 中学・高校教師であること。 2) 将来もしくはクラブ活動で開発教育を実践されている方。 3) 健康であること。 4) 年齢50歳以下であること。 5) 所属する学校長の推薦が得られる方。 6) 参加枠は、中学教師約20名、高校教師30名です。</p>	<p>1) 各校で開発教育に積極的に取り組まれている教師1名及び生徒4名(で女生徒2名ずつ)。 2) 健康であること。 3) 学校長より参加許可が得られること。 4) 保護者より同意書が得られること。 5) 参加枠は、茨城・北茨城地域から6校です。</p>
募集期間	6月1日～9月20日	1月8日～5月10日	9月15日～1月10日	1月下旬～5月上旬	5月中旬～6月末
応募締切	1) 本文：400字原稿用紙(84サイズ)に3枚以内 2) 別紙：400字原稿用紙(84サイズ)に①住所(郵便番号)、②氏名(フリガナ)、③電話番号、④性別、⑤学年、⑥年齢、⑦生年、⑧どのようにしてこのコンテストを知ったか(新聞・雑誌名など)、⑨海外渡航経験の有無を明記してください。 (入賞発表について) 12月上旬に入賞者に直接通知するほか、「国際協力」誌上にて入賞作品を発表の予定。	1) 本文：400字原稿用紙(A4サイズ)4枚以内 2) 別紙：400字原稿用紙(A4サイズ)に①住所(郵便番号)、②氏名(フリガナ)、③電話番号、④性別、⑤学年、⑥年齢、⑦生年、⑧どのようにしてこのコンテストを知ったか(新聞・雑誌名など)、⑨海外渡航経験の有無を明記してください。 (入賞発表について) 7月上旬に入賞者に直接通知するほか、「国際協力」誌上にて入賞作品を発表の予定。	1) 和文 400字原稿用紙(A4サイズ)30枚以内、ワープロ可。但し400字のマス目に入っていること。 2) 別紙 A4サイズ1枚に要約を記入。 3) 別紙 A4サイズ1枚に①論文、②分野、③アブローチ方法、④氏名、⑤大学名、⑥学年、⑦性別、⑧郵便番号、⑨電話番号、⑩住所、⑪性別、⑫生年月日、⑬年齢、⑭どのようにしてこのコンテストを知ったかを明記してください。 (入賞発表について) 3月に入賞者に直接通知するほか、「国際協力」誌上にて入賞作品を発表の予定。	1) 7月末、東京において2日間の事前研修を行います。 2) その後、約10日間の海外研修旅行を実施します。訪問国は、JICA事業の発展(プロジェクト)、専門系、青年海外協力隊員、現地の学校訪問を実施します。 3) 帰国後、2週間以内に研修報告書を出していただきます。 (参加費等について) JICAは往復の運賃、日本国内の交通費、食料、宿泊費、現地研修に必要な交通費を負担します。 2) 参加費用(自己負担)は、国内外の宿泊費、食事代、自費として10万円程度です。その他、研修費、予防接種料、個人保険料等の費用は個人負担となります。 3) 本事業は研修旅行であり、JICAは労災保険の加入を行いません。海外出張扱いの場合には所定先にて労災補償を受け、当該国にない場合は参加者自身で海外旅行傷害保険に加入していただきます。	1) 夏休み中、2泊3日のプログラムで実施します。 2) 中部国際センターを主会場兼宿泊舎として実施します。 3) プログラムには、研修実施風景の見学、研修員との懇話会、青年海外協力隊員や専門家の体験談講演や国際協力プログラムの実践、各校における国際協力・文化交流の発表、各校が企画する国際協力・文化交流の発表などが含まれます。 4) プログラム終了後、参加者全員にレポートを提出していただきます。 (参加費等について) 1) 学校から会場までの往復交通費(公共交通機関利用)を支給します。 2) 参加費に無料ですが、プログラム中の昼食・夕食代は自己負担となります。 3) JICA 負担で、参加者全員が国内旅行傷害保険に加入します。
審査・選考	各県審査人ほか	各県審査人ほか	大学教員ほか	1次審査(センター)及び2次審査(本部)	中部国際センターにて参加者を選考します。 中部国際センター TEL:052-702-1391
応募先・問合せ先	中部国際センター Tel:052-702-1391 または国内事業部国際課	中部国際センター Tel:052-702-1391 または国内事業部国際課	中部国際センター Tel:052-702-1391		

中学校・高校教師海外研修参加者リスト

JICA中部国際センター

年度	県名	教師氏名	学校名	派遣国	備考
1	愛知県	高橋 史雄	名古屋市立名東高等学校	マレーシア	
1	岐阜県	小串 泉	県立土岐北高等学校	パラグアイ,ブラジル	
1	三重県	出丸 久之	県立津高等学校	タイ	
2	愛知県	蛭川 喜信	県立半田高等学校	タイ	
2	岐阜県	杉野 茂樹	県立大垣北高等学校	タイ	
2	三重県	片山 茂	県立松阪高等学校	マレーシア,シンガポール	
3	愛知県	谷口 武	県立春日井高等学校	マレーシア,シンガポール	
3	岐阜県	渡辺 緑郎	県立加茂高等学校	マレーシア,シンガポール	
3	三重県	田中 佐喜男	県立四日市農芸高等学校	フィリピン	
4	愛知県	藤城 俊郎	県立時習館高等学校	フィリピン	
4	岐阜県	田邊 壽也	県立高山工業高等学校	フィリピン	
4	三重県	服部 好美	県立飯野高等学校	マレーシア,シンガポール	
5	愛知県	小笠原 鋭雄	県立岡崎工業高等学校	タイ	
5	岐阜県	山内 和幸	県立恵那高等学校	タイ	
5	三重県	熱田 幸嗣	県立明野高等学校	インドネシア	
6	岐阜県	玉置 啓二	県立各務原高等学校	ケニア	
6	三重県	山崎 恒哉	県立桑名北高等学校	中国	
7	愛知県	岩内 健二	名古屋市立桜台高等学校	エジプト,ジョルダン	
7	岐阜県	傍島 剛司	県立大垣東高等学校	マレーシア	
8	岐阜県	後藤 映子	県立大垣東高等学校	タンザニア	H9,12実体験プログラム参加
8	愛知県	石原 茂樹	安城市立東山中学校	ラオス	
9	愛知県	横本 直子	名古屋大学教育学部附属高校	ヴィエトナム	H8実体験プログラム参加
9	愛知県	廣田 栄克	県立熱田高等学校(定時制)	パナマ	
9	愛知県	木村 真由美	県立蟹江高等学校	パキスタン	
9	岐阜県	河崎 静男	県立大垣商業高等学校	パキスタン	
9	岐阜県	細江 隆一	可児市立西可児中学校	フィジー	
10	愛知県	成瀬 牧巳	県立春日井南高等学校	メキシコ,エル・サルヴァドル	H9実体験プログラム参加
10	愛知県	浅田 裕乃	桜丘高等学校(私立)	メキシコ,エル・サルヴァドル	
10	岐阜県	西尾 源寿	県立多治見北高等学校	メキシコ,エル・サルヴァドル	
11	岐阜県	足立 こずえ	中京商業高等学校(私立)	バングラデシュ	
11	三重県	橋爪 真理	三重県立四日市工業高等学校	バングラデシュ	
11	愛知県	武田 敏樹	半田市立乙川中学校	ラオス	
11	愛知県	深堀 良平	小原村立小原中学校	ラオス	
11	岐阜県	堀 純児	多治見市立北陵中学校	ラオス	
11	岐阜県	山田 達哉	岐阜市立長森南中学校	ラオス	
11	岐阜県	横山 真智子	岐阜市立陽南中学校	ラオス	
11	三重県	伊藤 信也	北勢町立北勢中学校	ラオス	
11	三重県	森 祥江	桑名市立明正中学校	ラオス	
12	愛知県	横井 徹	黄楊野高等学校(私立)	ケニア	
12	岐阜県	高山 里美	岐阜県立土岐紅陵高等学校	ケニア	
12	三重県	岡野 英治	高田中高等学校(私立)	ケニア	

講師派遣実績 (平成 11 年度)

JICA 中部国際センター

No.	実施日	県名	派遣先	講師	種別	所属先または出身国	受講対象者	受講人数	講義内容
1	6/28	岐阜	一宮市立浅井中学校 第5回浅井4校現職教育研修会	中村 浩孝	JICA 職員	JICA 中部国際センター業務課	小中学教師	130	
2	7/5	愛知	豊田市立美里中学校	杉坂 隆男	協力隊 OB		教師・学生	621	スリランカでの協力隊体験談 「世界に目を向けて生きる喜び」
3	7/17	愛知	半田市立青山中学校 ならわ分校	肥田 淳	国内協力員	JICA 中部国際センターアネックス		25	ザンビアでの協力隊体験談
4	8/26	三重	津市立西橋内中学校	池田 みづほ	協力隊 OG		教師・学生	40	ソロモン諸島での協力隊体験談* 隊長活動について
5	9/18	岐阜	岐阜市立長森南中学校	多々良友加利	協力隊 OG		学生	120	ラオスでの協力隊体験談* 隊長活動について
6	10/22	愛知	北里市民センター	多々良友加利 伊藤 久美子	協力隊 OG 協力隊 OG		北里高齢者学 級	40	ラオスでの協力隊体験談 ニカラグアでの協力隊体験談
7	10/23	愛知	名古屋国際センター (国際協力市民講座)	肥田 淳 菅沼 史世	国内協力員 協力隊 OG	JICA 中部国際センターアネックス	一般市民		ザンビアでの協力隊体験談 ニカラグアでの協力隊体験談
8	10/24	愛知	ウイリルあいち (国際協力シボゾボゾ)	田口 恭子	協力隊 OG				マレーシアでの協力隊体験談 パナマ「カカシ」地球市民としての国際協力」
9	10/30	岐阜	土岐少年自然の家 (岐阜県青年団体育指導者研修)	牛丸 洋美	協力隊 OG		青年団体育活動 リーダー	25	ラオスでの協力隊体験談 命にかかわる話(派遣先と日本を比較して)
10	10/30	愛知	愛知県立大府東高等学校	服部 洋子	協力隊 OG		教師・学生	240	ミクロナシア連邦での協力隊体験談 「国際理解、援助とは何か」
11	11/4	愛知	東浦町立万龍小学校	山本 基博	協力隊 OB		教師・学生	65	ジンバブエでの協力隊体験談* 協力隊参加の動機、活動内容、苦労したこと
12	11/5	愛知	蒲郡市立形原中学校	伊藤 重紀	協力隊 OG		学生	60	チュニジアでの協力隊体験談
13	11/6	愛知	安城市立明祥中学校	福田 しのぶ	協力隊 OG		学生	24	ホンジュラスでの協力隊体験談、協力隊概要
14	11/7	岐阜	岐阜県立各務原高等学校 高等学校国際教育研究協議会	藤井 智子	協力隊 OG		教師・学生	40	ガーナでの協力隊体験談、国際理解・国際協力につ いて
15	11/9	愛知	東浦町立森岡小学校	小川 範人	協力隊 OB		学生	72	パラグアイでの協力隊体験談、協力隊の現状
16	11/15	愛知	刈谷市立刈谷東中学校	中村 浩孝	JICA 職員	JICA 中部国際センター業務課	学生	261	「生き方について」
17	11/20	愛知	名古屋市立若水中学校	上原 真一	協力隊 OB		学生	151	ガーナでの協力隊体験談
18	11/21	愛知	江南市民文化会館 (国際協力市民公開講座)	平澤 由美 伊藤 嘉規	協力隊 OG 協力隊 OB		市民	400	ニカラグアでの協力隊体験談 ボリビアでの協力隊体験談
19	11/23	三重	四日市市文化会館	近藤 久子	協力隊 OG		教師・学生・ ローラーガール	160	コロンビアでの協力隊体験談
20	11/25	三重	北勢町立十社小学校	筒井 美幸	協力隊 OG		学生	56	ドミニカでの協力隊体験談* 「今私たちにできること」
21	12/1	三重	セトビ7女子学園高等学校	小林 聖子	国内協力員	JICA 中部国際センターアネックス	学生	28	パナマでの協力隊体験談

22	12/6	愛知	刈谷市立刈谷東中学校	肥田 淳	国内協力員	JICA 中部国際センター・ネオガス	学生	24	ザンビアでの協力隊体験談 協力隊概要
23	1/29	三重	津市青少年野外活動センター (リ・ガ・ス・ゼナ)	小林 聖子 田端 郁子	国内協力員 協力隊 OG	JICA 中部国際センター・ネオガス	学生	50	パラグアイ、ブルガリアでの協力隊体験談 赴任国の人々の生活の様子
24	1/30	三重	三重県障害者学習センター 国際理解フォーラム	前田 深香	協力隊 OG		ボーイズアウト ガールズアウト	80	マレーシアでの協力隊体験談
25	2/2	岐阜	羽島北高等学校	杉山 慎	協力隊 OB		学生	680	ザンビアでの協力隊体験談
26	2/5	岐阜	岐阜市立長森南中学校	内藤 勝 服部 洋子 奥村 菜子 中村 浩幸	協力隊 OB 協力隊 OG 協力隊 OG JICA 職員	JICA 中部国際センター・業務課			マレーシア「隊員活動を通して考えたこと」 ミクロネシア連邦「今の中学生に考えて欲しいこと」 ザンビア*
27	2/9	三重	藤原町立藤原中学校	米山 由佳	協力隊 OG		学生	300	タンザニアでの協力隊体験談 「今の中学生に考えて欲しいこと」
28	2/19	愛知	豊橋市民センター 高校生ボランティア交流会	高島 史弘	協力隊 OB		学生	100	エグアドルでの協力隊体験談
29	2/22	愛知	名古屋市立高針小学校	服部 洋子	協力隊 OG		学生・父兄		ミクロネシア連邦での協力隊体験談
30	3/2	愛知	安城市立榎井中学校	安田 智幸	協力隊 OB		教師・学生	24	ボツワナでの協力隊体験談
31	3/3	岐阜	揖斐川町立北和中学校	伊藤 敦子	協力隊 OB		学生	90	マラウイでの協力隊体験談 隊員活動について

計 31件 (うち、サーモン・キャンペーン5件、講師紹介26件)

注：*印はサーモンキャンペーン

無印は講師紹介のみ。

講師派遣実績 (平成12年度)

JICA 中部国際センター

No.	実施日	県名	派遣先	講師	種別	所属先または出身国	受講対象者	受講人数	講義内容
1	5/14	東京	日本学生協会基金	大久保 晶光	JICA職員	JICA 中部国際センター 業務課	協会所属大学生	40	今の仕事内容と国際協力の必要性*
2	6/1	愛知	名古屋女子大学	中村 浩孝	JICA職員	JICA 中部国際センター 総務課	家政学部1年	不明	途上国の人々の生活と文化 (マラウイでの協力隊経験を踏まえて)* マレーシアでの協力隊体験談#
3	6/15	三重	鈴鹿国際大学	井高 節子	協力隊OG		学生		
4	6/15	三重	中京女子大学	加藤 正博 菊岡 由夏 安田 智幸	協力隊OB 協力隊OG 国内協力員	JICA 中部国際センター アネックス			ドミニカ、プータンでの協力隊体験談 #
5	6/17	愛知	同朋高等学校	大久保 晶光	JICA職員	JICA 中部国際センター 業務課	普通科・商業科1-3年生	20	国際交流経験・出張時の体験*
6	6/17	愛知	名古屋市立鳴海中学校	ティチャ、フン	研修員	タイ、ヴィエトナム	1年生	39	自国紹介、ダンス・ゲーム指導*
7	6/17	愛知	松平中学校	小川 純人 菊岡 由夏	協力隊OB 協力隊OG		学生	200	パラグアイ、プータン協力隊体験談#
8	7/2		シガールカールカント	奥谷 信人	協力隊OB		小学生		ザンビアでの協力隊体験談
9	7/5	愛知	県立佐屋高等学校	吉村 穂	JICA職員	JICA 中部国際センター 業務課	農業科・工業科3年生	63	途上国実情、アフリカ熱帯農業*
10	8/1	岐阜	岐阜市中学教師家庭科研究会	藤井 智子	協力隊OG	神戸町立神戸中学校	家庭科教員	25	ガーナ食文化紹介、ガーナ料理実習
11	8/2	岐阜	岐阜県立土岐紅陵高等学校	高島 恭子	協力隊OG		2年生	3	フィリピンでの看護婦としての協力隊体験*
12	8/15	三重	津市神戸青少年野外活動センター	井高 節子	協力隊OG		生徒・教員	15	マレーシアでの協力隊体験談 #
13	8/29	愛知	南山中学校	大田 宣人 長谷川 紀子	協力隊OB・OG		女子部2年生	3	ボツワナとエクアドルでの協力隊体験談*
14	9/5	岐阜	岐阜市立陽南中学校	井口 博恵	協力隊OG		1-3年生	13	中国での協力隊体験談*
15	9/14	愛知	半田市乙川中学校	菊岡 由夏	協力隊OG		1年生	40	プータンでの協力隊体験談#
16	9/19	愛知	豊橋真高等学校 (学校祭)	長嶋 裕子 上原 慎一	協力隊OG 協力隊OB		学生・職員	1100	ジョルダンでの協力隊体験談 ガーナでの協力隊体験談#
17	9/20	岐阜	岐阜市立陽南中学校	ボヤン・メネブ	研修員	モンゴル	2年生	35	生徒の日本文化発表へのコメント*
18	9/21	岐阜	岐阜市立陽南中学校	真鍋 利佳子	協力隊OG	岐阜県立希望ヶ丘学園	1-3年生	19	マレーシアの衣食住*
19	9/21	愛知	津島女子高等学校	小林 花	ジュニア専門員	森林自然環境協力部 森林環境協力隊	全校生徒	700	JICAの活動とネパールでの協力隊体験談*

20	9/28	愛知	大府東高等学校	菊岡 由夏	協力隊OG		2年生	265	ブータンでの協力隊体験談
21	9/30	愛知	千種障害センター	香藤 千絵	協力隊OG		女性教員	50	コスタリカでの協力隊体験談#
22	10/8	愛知	弥富高等学校	リ一、ヒラック	研修員	カンボジア			自国紹介、交流
23	10/19	岐阜	土岐市立黙知中学校	井口 博恵	協力隊OG		3年生	30	「平和に向けて-国際情勢-」、中国で見たこと、感じたこと*
24	10/19	愛知	名古屋市立向陽高等学校	西尾 和久	協力隊OB		1年生	400	パプアニューギニアでの協力隊体験談#
25	10/21	愛知	東浦町立片徳小学校	菊岡 由夏	協力隊OG		6年生	51	ブータンでの協力隊体験談#
26	10/27	愛知	小牧市北理市民センター	新美 保夫 沼田 尚子	協力隊OB 協力隊OG		高齢者	42	エチオピアでの協力隊体験談 中国での協力隊体験談#
27	10/30	岐阜	岐阜市立加納中学校	真鍋 利佳子	協力隊OG	岐阜県立希望ヶ丘学園	1年生	38	マレーシアの人々の生活、日本との交流
28	10/31	岐阜	美濃加茂市立西中学校	佐藤 睦	JICA職員	JICA中部国際センター 総務課	1年生	267	協力隊概要説明、中国の文化・生活紹介、日本語教師としての活動、日中戦争 協力隊員としてのフィリピンの体験 自国紹介、料理を体験して紹介、歌・ダンス指導、交流
29	10/31	愛知	三好町立北中学校	高井 志野 中等教育開発コース 研修員8名	協力隊OG 研修員	マレーシア、ミャンマー、 パレスチナ、フィリピン、 タンザニア、ウズベキス タン、ルワンダ、アルバ ニア	3年生		
30	11/8	岐阜	岐阜市立長良小学校PTA	佐藤 政富	JICA職員	JICA中部国際センター 総務課	PTA	*	
31	11/13	三重	桑名市立明正中学校	筒井 美幸	協力隊OG	(財)三重県国際交流財 団	1-3年生	509	協力隊説明、援助する理由、ドミニカ共和国の概要と人々、音楽紹介、ダンス指導*
32	11/18	愛知	名古屋市立鳴海中学校	シヤンタス	研修員	インド	1年生	40	自国紹介、ダンス紹介*
33	11/22	岐阜	岐阜市立長良中学校	高田 良朗	協力隊OB		2年生	32	ボンデヌラスの状況を検討し、日本の現状を議論*
34	12/2	愛知	名古屋市立費船小学校	ヒラック、 カドカ	研修員	カンボジア、 ネパール	5年生	99	自国紹介、ゲームをし交流*
35	12/11	愛知	愛知県農業協同組合中央会	太田 宣人	協力隊OB		農協営農指導員 養成研修生	24	海外農村事情、現場紹介、困ったこと
36	1/19	愛知	東浦町立森岡中学校	西尾 和久	協力隊OB		6年生	54	パプアニューギニアでの協力隊体験談#
37	1/20	愛知	名古屋市立鳴海中学校	フェルナンダ	研修員	コロンビア	1年生		コロンビアの生活について
38	1/20	三重	多度町立多度中学校	森川 直昭	協力隊OB		5・6年生	109	ケニアでの協力隊体験談
39	1/20	愛知	名古屋市立守山小学校	豊岡 正進	協力隊OB		6年生 教師	91 6	タンザニアでの協力隊体験談#
40	1/25	愛知	愛知県立中川商業高等学校		協力隊OB		3年生	40	ラオスでの協力隊活動の様子
41	1/26	岐阜	岐阜県立土岐紅陵高等学校	沼田 尚子	協力隊OB		3年生	32	中国での協力隊体験談

42	1/27	岐阜 協賛会	岐阜県高等学校国際教育研究 協賛会	佐藤 隆	JICA職員	JICA中部国際センター 総務課	1-3年生、教員	JOCV概要説明、中国の概要説明、中国語・習字について、少数民族、日中間の歴史問題、協力隊体験談*
43	1/29	岐阜	岐阜県立土岐紅陵高等学校	沼田 尚子	協力隊OB		3年生	33 中国での協力隊体験談
44	2/9	愛知	名古屋市長高針小学校	豊岡 正道	協力隊OB			タンザニアでの協力隊体験談#
45	2/15	愛知	安城市立安祥中学校	永島 玲子	協力隊OG		2年生 保護者	173 ジョルダンでの協力隊体験談 100 #

計 45件 (うち、サーモン・キャンペーン17件、講師紹介28件)

注：*印はサーモンキャンペーン、無印は講師紹介のみ。

#印は中部国際センターアネックスで受付、無印は中部国際センターで受付。

集団コース研修実施一覧（平成12年度）

コース名	定員	来日	帰国指定日	主たる研修機関
1 物流近代化	8	2000.4.3	2000.6.5	中部運輸局
2 溶接技術者	8	2000.4.10	2000.9.25	(社)日本溶接協会
3 機能性無機材料の開発応用	7	2000.5.8	2000.7.24	(財)アインテックスセンター
4 ハイオイドンタストリー	10	2000.5.15	2000.7.10	(財)パライダストリー協会
5 高度マイクロウェーブ通信技術	7	2000.5.22	2000.8.5	西日本NTT研修センター
6 電気事業経営Ⅱ	7	2000.8.28	2000.10.9	中部電力
7 金属加工高品質化技術Ⅱ	6	2000.8.28	2001.1.22	愛工技センター
8 セラミック窯炉及び焼成技術	8	2000.9.4	2001.2.26	(株)美濃窯業
9 火災予防技術	6	2000.9.18	2000.12.4	名古屋消防局、消防庁
10 デジタル伝送技術	11	2000.9.18	2000.12.4	西日本NTT研修センター
11 光線路技術	10	2001.1.8	2001.3.12	西日本NTT研修センター
12 オイスク力農業者育成（11年度）	18	2000.1.23	2000.12.22	(財)オイスカ
13 中小企業診断Ⅱ	9	2000.5.8	2000.8.7	(社)中小企業診断協会
14 産業排水処理技術及び省エネ技術	8	2000.5.15	2000.7.3	(財)ICETT
15 産業技術教育	10	2000.6.12	2000.7.29	愛知教育大学
16 エネルギー関連設備の管理と技術基準	10	2000.8.28	2000.10.16	愛知工研協会
17 製鋼における省エネとリサイクル技術	7	2000.8.28	2000.12.4	中部鋼鉄、愛知製鋼(株)
18 材料性質改善処理技術	6	2000.8.28	2000.12.18	愛知工研協会
19 地方環境保全行政	6	2000.9.4	2000.10.16	名古屋市環境保全局
20 石油化学工業における環境管理技術	10	2000.9.11	2000.11.20	(財)ICETT
21 生活習慣病対策	5	2000.10.2	2000.11.6	(財)愛知県健康づくり振興事業団、他
22 参加型地域社会開発のプロジェクト計画・管理	8	2000.10.2	2000.11.13	日本福祉大学
23 中等教育開発	6	2000.10.16	2000.11.20	名古屋大学教育学部
24 小水力発電	8	2000.10.16	2000.11.20	中部電力
25 上水道無収水量管理対策	8	2000.10.16	2000.12.4	名古屋市上下水道局
26 GIS(地理情報システム)による天然資源・農業生産物の管理	5	2000.11.20	2000.12.18	名古屋大学農学部
27 都市開発における土地区画整理事業実施	10	2001.1.8	2001.3.26	(財)名古屋都市センター
28 オイスク力農業者育成（12年度）	18	2001.1.21	2001.12.20	(財)オイスカ
29 産業排水・廃棄物の処理及びリサイクル技術	8	2001.1.22	2001.3.5	(財)東海技術センター
30 地球温暖化防止技術	10	2001.1.22	2001.3.12	(財)ICETT

31	参加型地域社会開発の理論と実践	10	2001.2.5	2001.3.26	日本福祉大学
32	地域がん予防対策	7	2001.2.19	2001.4.23	愛知県がんセンター
33	日産産業工学・品質管理	9	2000.3.20	2000.11.19	(社)中部産業連盟
34	カンボディア地方教育行政	9	2000.5.15	2000.6.19	名古屋大学院国際開発研究科
35	南ア中小企業経営	11	2000.6.5	2000.7.31	(社)中部産業連盟
36	南米地域水質保全	14	2000.7.17	2000.9.25	(財)ICETT
37	アジアト地域環境モニタリング	5	2000.9.4	2000.12.4	(財)ICETT
38	チリ都市システム開発	15	2000.9.18	2000.10.28	国連地域開発センター
39	フィリピン地域振興	10	2000.10.1	2000.11.5	足助町他
40	南米地域都市廃棄物処理	9	2000.10.2	2000.11.14	環境事業団
41	サウジアラビア工業教育	5	2000.10.23	2000.11.20	愛知工研協会
42	中国公害防止管理者制度	8	2000.10.30	2000.12.18	(財)ICETT
43	ラオス法整備支援	10	2000.11.1	2000.12.4	名古屋大学法学部
44	インドネシア稲野産産管理者	10	2000.11.20	2000.12.18	愛知工研協会
45	ルーマニア生産システム改善技術	6	2001.1.8	2001.3.19	(社)中部産業連盟
46	マレーシア特殊鋼鋳鋼	5	2001.1.15	2001.3.12	日本鑄造(株)
47	ヴィエトナム都市開発の計画と管理	8	2001.1.21	2001.2.25	国連地域開発センター
48	東欧大気汚染防止技術	12	2001.1.29	2001.3.12	(財)ICETT
49	7/11・コンビニ・オ和平和特別地域保健行政	10	2001.1.29	2001.3.15	(財)アジア保健研修財団
50	南ア中小企業育成	10	2001.2.19	2001.3.19	愛知工研協会
	マレーシア火災調査	5	2000.7.24	2000.9.3	名古屋市消防局
	チリ地域住民参加型林業の運営管理	2	2000.9.25	2000.11.23	岐阜県森林課、林業短大

青年招へい事業実績（平成11-12年度）

JICA中部国際センター

平成11年度

招へい国名	実施県	分野名	人数	期間	地方実施団体	招へいタイプ
中国	三重	公務員	25	6/2～6/9	(財)三重県国際交流財団	ホームステイあり
アセアン混成	岐阜	公共・公益事業	24	7/28～8/4	岐阜県世界青年友の会	ホームステイあり
アセアン混成	愛知	科学技術	24	7/28～8/4	(財)豊川市国際交流協会	ホームステイ・合宿セミナーあり
スリ・ランカ	愛知	教育（小中高教員）	10	9/30～10/4	(財)愛知県国際交流協会	ホームステイ・合宿セミナーあり
タイ	愛知	経営経営	23	1/26～2/2	ジャバヤングサークル東海支部	ホームステイあり

平成12年度

アセアン混成	岐阜	教育行政	26	7/5～7/12	岐阜県世界青年友の会	ホームステイあり
タイ	愛知	地域振興（地域社会開発）	23	7/26～8/2	ジャバヤングサークル東海支部	ホームステイあり
アセアン混成	愛知	科学技術	24	8/23～9/9	(財)豊川市国際交流協会	ホームステイ・合宿セミナーあり
ブータン/モルディブ	愛知	教育（小中高教員）	10	11/15～12/2	(財)愛知県国際交流協会	ホームステイ・合宿セミナーあり
中国	三重	教員	24	12/5～12/10	(財)三重県国際交流財団	ホームステイあり

注：「アセアン混成」とはインドネシア・マレーシア・フィリピン・タイ・ベトナム・ラオス各国の混成グループです。

問い合わせ先

JICA 中部国際センターでは、高校生国際協力実体験プログラム、高校生エッセイコンテスト、高校教師海外研修、サーモン・キャンペーンに関するもの他、日本の政府開発援助（ODA）、国際協力事業団（JICA）、青年海外協力隊、シニア海外ボランティアに関する情報を提供しております。また、学校の授業や文化祭等で活用していただくためのビデオテープや写真パネルの貸し出し、講師の派遣も行っております。お気軽に下記までご相談下さい。

国際協力事業団（JICA）中部国際センター
〒460-0094 名古屋市名東区亀の井 2-73
電話：052-702-1391 FAX：052-702-1397

★青年海外協力隊及びシニア海外ボランティアに関する
お問い合わせはこちら…

国際協力事業団（JICA）中部国際センター・アネックス
〒460-0002 名古屋市中区丸の内 2-4-7 愛知県産業貿易館西館 8 階
電話：052-221-7103 FAX：052-201-9516

JICA

LIB